

355  
617



\* 0038682000 \*

2

0038682-000

特 274-177

変態性医学講話

沢田順次郎・著

通俗医書刊行会

昭和9

AGG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第67条の規定に基づき、平成12年3月  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

614

特274  
177



變態性醫學講話

澤田順次郎著



本書は題して「變態性醫學講話」といふけれども、單に變態性醫に止まらず、廣く性慾に涉つて、一般の原理及び現象をも、説述したのは、對象として、普通に謂ふところの性慾、即ち常態性慾を説かなければ、變態性慾の如何なるものなるかと、解知されないからである。

孰れにしても性慾を研究するには、學術的の解説を要するに依り、心理學、病理學は勿論のこと、生物學、社會學、倫理學、法理學、犯罪學及び史學等の助けを、藉らなければならぬ。

然るに世人は、性慾又は戀愛といへば、直ぐに淫蕩的若くは耽美的のものとして、むしろこれを娛樂に供せんとする傾きあるのは、甚だしき間違ひであると共に、大なる危険である。

何でも世人は、變態性慾といへば、彼の獵奇のエロ的のものと思惟して、之れを緝く人も、これを讀む人も、そのつもりで、祕密にするやうだが、變態性慾は決してさういふ獵奇なものでも、又は淫猥なものでもない。換言すれば變態性慾の全部とはいはぬ、或る種のもものは、尋常人の頭腦中に包藏されて、それを實際に、現はしてゐるものである。

序 文



無論、變態性慾には、猥奇なるもの、殘忍なるもの、或ひは猥褻なるもの等も、混じてあるが、中にはまた 美的情操又は美しき性的感情の流れもある。又、錯倒症の中でも、症状の軽いものは、何人にも存して、必ずしも變態性慾と、謂はれないものもある。

そればかりでなく、精神分析學に依ると、性慾の中には、常態と變態との二種が、混在して、常態ともなり、又は變態ともなることが、明かに知られてゐる。潜在意識の中に、含まれるものの中に、變態性慾の遺傳的に、又は幼時の養育中に、獲得したもの（無意識に）の存することは、最近の研究で明かになつた。

さういふ遺傳素質を有するもの（謂ゆる先天性）、又は幼時に獲得して、潜在意識となつてゐるものが、物の衰れを知る頃になつて、性慾の壓迫、又は禁絶を蒙むるが如きことある時は、性慾が異常に亢進するか、然らざれば、同性に思ひを寄せて、これに愛を注ぐやうにもなる。同性愛といふのはこれで、老嬢、獨身者、僧尼等に見ることが多い。

又、無智の少年に、自慰の有害を暗示して、これを矯正せんとする方法を、講ずる醫師、又は教育家等があるが、これは一利一害で、多くの少年中には、恐怖の餘り、腦性又は生殖器性の神経衰弱に、罹ることが多くある。強迫觀念も、これから起ることが多くある。

妊娠を恐るること、甚だしきときにも、性慾に異常を來たして、同性愛に陥ることがある。月経障害も、性慾に異常を來たすことが少なくない。

斯様に變態性慾は、性慾の異常より來たり、而して性慾の異常は、反生理的生活より、誘はるることが多いので、變態性慾を研究するには、前に一言せる如く、性慾の原理に遡つて、その常態より變態に、移行する状態を、考察すること必要である。

併し問題は問題だから、誤解されないやうに、嚴正な立場から、開拓する志を失はないやうにして貰ひたい。これ讀者に希望するところである。而して此の書が若も、學術の参考となつて、幾分にも裨益するところあれば、著者の光榮とするところである。蕪辭を綴つて、序文となすこと爾り。

昭和九年五月

澤田順次郎謹識

## 凡例

一 變態性慾は、性慾の過半を占めて、非常に廣い範圍に涉つてゐる。曩に予は、變態性慾の全般を包括して、編述する豫考であつたが、筆を起こして三分の一に足りない中に、豫定の紙數に達したので、遺憾ながら残つた分は、次ぎに廻はさなければならなくなつた。

一 その残つたものは、サヂスミス、ラストモード、屍姦、獸姦、マゾヒスムス、食尿症、フイテイシスムス、偷視症、偶像又は彫刻に對する戀愛、人形に對する戀愛、ナルチサス、身體的半陰陽、生殖器神、露出症、同性愛の歴史及び地理的分布、精神病的性慾異常、賣笑婦、文身、髪切り、情死、變態性慾と法律等で、これ等は、第二卷及び第三卷に譲らなければならなくなつた。引き続き出版する豫定だから、御愛讀を乞ふ。

一 本書は、二十餘年前に出版した「變態性慾論」とは、全然趣きを異にすることは、本書の發行趣意書に明らかである。此の點諒解して貰ひたい。

一 随分長い間かゝつて、書いたものであるけれども、淺學寡識のため、足らざるところ甚だ多く、慚愧に堪えぬ。御指導を賜はらんことを、偏に希望する次第である。

## 本書の著作及び発行の趣意

變態性慾なる語は、近來よく、人の言ふところで、何か少しでも、變つた行爲をする者があると、あれは變態性だ、病的だと、譯もなくいふ。

かう一口に言つて了へば、何でもないが、併し變態性慾といふものは、如何なる性質のもので、如何なることをするものをさして謂ふか。その意義も、原理も判明らないで、たゞ無闇に、醜惡なるもの、恐るべきものやうに言ふのは、間違つてゐないかと思ふ。

勿論、變態性慾は、決してよいものでも、芳ばしいものでもない。その中には、實際に甚だ恐るべきものや、厭ふべきもの等多くあつて、明るみに出されないものもあるが、併しさういふものの存在は、恰度人體に、病氣があるのと、同じ理由のものであるから、その病患を治すのと、同じ目的の下に、吾人はその變態性慾者を、治療もし、豫防もしなければならぬ。

さうするには、先づもつて變態性慾の、如何なるものなるかを明かにし、それからして、本格的に、研究の歩を進めて行かなければならぬ。これが當然で、また研究の順序なのである。

何故に、此の恐るべく厭ふべき變態性慾が、斯く流行語となつて、口にせらるるやうになつたかと、いふに就いては、恰度、これに比喩すべきものがある。それはヒステリーで、これも近代的の、流行語となつてゐるが、それが世人を脅かして、少しでも感情に變りのあるもの、例へば怒り易く、喜び易く、氣難かしい者があると、直ぐにヒステリーだの、ヒステリックだのといつて、何でもヒステリーにしてしまふ。それと同じやうに、變態性慾も、口癖のやうに言はるるが、多くは誤解で、その意義を知るものは少い。

然らば變態性慾は、世に稀有なものであるかといふに、決してさうでない。精密に調査した結果に依ると、吾人の思つたよりも、むしろ遙に多くあるのだけれども、これに關する知識が、乏しいために、却つて變態性慾を、見逃してゐる場合も珍らしくない。孰れにしても無見識と謂はなければならぬ。

何うして變態性慾が、誤解されたり、見落しされたりするか。これに就いて一言しなければならぬ。此の語は、前に言つた如く、近代の新術語で、我が國では、明治四十三、四年頃から、ぼつ／＼用ひられたが、その以前にはなかつた。予はその頃は青年であつたが、變態性慾とい

ふ語を使つたものはなかつた。勿論、英和辭典にも、翻譯の成書にも、見當たらなかつた。そればかりでない。第一その頃は、性慾と云ふ語からして珍らしく、以前は單に、色情だの、情慾だの、或ひは淫慾などと、いつてゐたものだ。恰度そのあたり、予は、男女の形質及び精神に關する研究を始めて、「男女之研究」と題する一書を、光風館から上梓した。(明治三十七年七月)

この書は、大鳥居奔三氏との共著で、ハヴエロツク・エリス氏の「男女」Ellis, H. H. Man and Woman. を、基礎とし、それに卑見を交へたもので、洛陽の紙價を貴からしめた觀があつた。然るに此の頃は、まだ男女の學術的區別を、簡單に言ひ現はす語がなかつたので、色々考へた末、性別といふ新語を作り、そのうち性別學に關するもので、「自然界に於ける兩性の秘密」一名「人類性別學」と題する著書を、博文館から發行した。(明治四十一年十月十九日)この性別學は、セクソロジー Sexology に採つたもので、英、獨の辭書には、立派にあるが、日本では予輩の採用が、創めであつた。

此の性別の性に、ヒントを得た予輩は、從來の通用語で、あるところの色情や、淫慾といふやうなもの、卑猥を避くるために、セックス Sex を譯した性慾といふ新語を作り、これを代



用語として、これに關する著書を出した。それは「性慾論講話」と題するもので、初版は大正元年十一月であつた。今日から見ると、淺學不才で、汗顔に堪えないが、それでも當時は、相當に歓迎せられ、十數版を重ねた。

それから性慾といふ語が、流行り出して、一般に用ひらるるやうになつたが、一方にはこの性慾も、卑猥の感を與へるので、これを用ひるのは、宜しくないといふ説を、唱へる者もあつた。これは慾といふ字が、よくないといふことで、これを標榜する本は、發賣を禁止するとなつて、論議されたといふことである。

此のことは、當時警視廳の醫務部長をしてゐられた、醫學士栗本庸勝氏から聞いたことで、同氏からも、慾の字は、去つた方がよからうと、注意されたこともある。勿論、栗本氏は、予の立場を、よく諒解してゐられるので、種々援助を與られたことを、今でも感謝してゐる。併し、その後も、世人の性慾に對する思想は、依然として偏見の的であつた。性慾は、セックスの譯語だから、性慾といひやうが、或ひは單に、性といひやうが、セックスに變りのない以上は、どちらを用ひても、さし支へはないと思ふ。

性慾を、單に卑猥なもの、惡劣なものと思へる人から見れば、性慾の研究など、以ての外と

考へられたかも知れないが、性慾の根本に遡つて、その人生との關係を、窺へば、性慾は道德の基礎であつて、道德は、性慾から出發したものであることが、知らるのである。

して見ると、性慾は、自然の攝理に、根蒂を發したもので、毫も、卑しむべきものでも、恥づべきものでもないが、それを卑猥なものにして、排斥しやうとしたのは、大なる誤りで、この謬見を去ることが、やがて性慾研究の目的であることを、予輩は飽くまでも主張し、それがために世間から譏られたり、妨害されたり、隨分壓迫を蒙つたが、それに屈せず、遂ひ今日に至つたのである。

性慾の研究に於ける、予の見地は、右の如くであつたが、併し大聲俚耳に入らなかつたのは、時期尚早かつたためかも知れないが、遺憾の極みであつた。

一般性慾のことは、それにして、それから今度は、進んで「變態性慾論」と題する新著を、春陽堂から出版した。八百ページのもので、故醫學博士羽太銳治氏が、ドクトル時代に、共著としたものであるが、その實は、全部みな予の執筆なのである。初版は大正四年六月十二日で十數版を重ねてゐる。

此の書は、クラフト・エビング氏の傑著、「病的性慾心理」Richard Von Krafft-Ebing-*Psychojp.*

athia Sexualis. を、基礎としたもので、變態性慾の原理を、闡明することに、努めたものである。併し今日から見れば、古くして、時代遅れとなつたことは、勿論であるが、變態性慾に關する一般の事實を、網羅したので、變態性慾といふものは、殘虐や淫猥、又は同性愛等の如く、不自然的性慾の、極まりなき事實を、取り扱ふものと 讀者の頭に、印象されたい。

これは無理のないことで、變態性慾には、サチスミス、マゾヒスミス、フェティシズム、屍姦、獸姦等の如き、殘虐なものや、姦通、強姦等の如き、不倫のものや、同性愛の如く、性慾の倒錯したもの、その他露出症、食尿症等の如き、猥褻、汚穢なるもの等數多あるが故に、世間から嫌厭されたに違ひない。

併しこの嫌厭は、單に變態性慾の輪廓を見て、深くその内容を、探らないために起こつた感情で、それがそも、誤解の原となつたのである。變態性慾を、單に惡劣卑猥なものとした觀念は、ここに胚胎したのである。

併し物は何でも、十分に研究した上でないと、その利害得失を、明かにすることは、難かしいものである。例へば犯罪の如きそれで、犯罪は社會の安寧秩序を紊し、或ひは風俗を壞亂して、人類の共同生活を、害するものであるけれども、これを研究しなければ、その原因も、

これを豫防する方法も、知ることを得ないと同じく、變態性慾もその悪いことや、淫らなこと乃至は、その汚ないことまでも、具體的に研究した上でないと、これを防遏することも、矯正することも、出来ないものである。

さういふ譯で、今度、新しく筆を呵し、想を練つて、漸く完成したものは、即ち本書で、病理心理は勿論、社會、宗教、道德、法律、歴史及び文藝等の上から、變態性慾に關する、あらゆる事實を、蒐集して、系統的に論究したものである。前の「變態性慾論」は、最早、絶版になつたが、その發行以來、旨に二十四星霜を経てゐる。その間、精神病學、法醫學、心理學、犯罪學等の進歩著しく、それらの上に現はれたる實例や、實社會に於ける新事實の夥しきこと、積んで山を成すといふも、誣言でない。

これ等の新材料は、みな本書に採録して、漏らすところはない、即ち二十餘年間、努力の結果で、舊「變態性慾論」とは、全然組織を異にし、新規軸を出した點に於いて、同書の燒直しと見られないやうに、希望する次第である。

目次

緒論

第一節 結婚難……………一

第二節 性慾の禁壓……………三

第三節 性的恐怖……………四

第四節 性慾異常の種類……………八

第五節 變態性慾の意義、原因及び症狀……………一

總論

第一章 流行性を帯びたる變態性慾……………一五

第一節 露骨と變態との尖銳化……………一五

第二節 辛烈なる興味を要求する近代人……………一八

第三節 目前屋理太郎……………三一

第四節 徳兵衛とお房……………三三

第五節 夫婦の倦怠期と不祥事……………三六

第六節 事實の概括……………三七

### 第二章 變態性慾の範圍、研究及びその分類

第一節 その狹義と廣義とに依る範圍……………三九

第二節 謂ゆる色情狂……………三一

第三節 性慾異常を呈する精神病の程度及びその解説……………三三

第四節 變態性慾の歴史及びその研究家……………三九

第一項 古代の學者……………三九

第二項 性教育より觀たる自慰……………四二

第三項 性の科學者……………四四

第四項 變態性慾の専門家……………五三

第五項 病的性慾及び生殖の研究……………五五

第六項 精神分析學、同性愛及び半陰陽の研究……………五七

第七項 貞操、賣笑及び風俗の研究……………六〇

第五節 變態性慾研究者の學說分類……………六二

### 第三章 變態性慾一般の研究法

第一節 原則違反の模擬……………七四

第二節 變種と謂ゆる變人……………七六

第三節 變態性慾の内容……………八〇

第四節 變態性慾の症狀……………八五

第五節 變態性慾研究の必要——其の理由……………九〇

第六節 變態性慾の研究法……………九三

    第一項 一般の研究法……………九三

    第二項 初學者の心得……………九四

    第三項 觀察法……………九六

    第四項 研究家の職業……………九九

    第五項 小説、傳説及び神話等に現はれたる變態性慾……………一〇一

### 第壹篇 變態性慾の原因と發生發達及び要素……………一〇五

#### 第一章 戀愛の發生と潜在意識……………一〇五

    第一節 精神分析學上の考察……………一〇五

        第一項 無意識の戀愛……………一〇五

    第二項 嬰兒又は幼兒の養育者に對する戀愛……………一〇七

    第三項 初戀と潜在性戀愛……………一〇九

    第二節 戀愛感情と瞬間の戀……………一一三

    第三節 相思相愛の戀と片思ひの戀……………一二六

    第四節 片思ひの戀と變態性慾……………一三〇

    第五節 戀人を定むる心理……………一三一

    第六節 戀人は妹に生寫し……………一三五

        例 ニューヨークの共進會で見た婦人と妹……………一三六

    第七節 夫婦の容貌類似……………一三八

#### 第二章 同性愛の原因及び兩性の區別……………一三九

    第一節 同性愛の本質……………一三九

        第一項 同性愛の濫觴につき歴史上の事實と人類學上の事實……………一三九

第二項 同性愛の事實……………一三二

第三項 同性愛を構成せる單性と複性との區別……………一三三

第二節 同性愛の起源とその動物より人間に傳はれる徑路……………一三五

第一項 同性愛の起源に關する二説及び生物學上の事實……………一三五

第二項 隔世遺傳と環境……………一三七

第三項 同性愛と自慰との關係……………一三九

第三節 先天性と後天性との區別……………一四一

第四節 細胞性と潛在性……………一四三

第五節 複性と男女の區別……………一四六

第一項 複性の原理……………一四六

第二項 兩性の類似する原因……………一四七

第三項 變態的男女の職業……………一四九

第六節 性的人格と性的感情との類別……………一五一

第七節 性的人格の發達……………一五三

### 第三章 先天的同性愛又は同性間性慾……………一五五

概 説……………一五五

第一節 先天的同性愛の理論及び學說……………一五八

第一項 同性愛者の艶夢……………一五九

第二項 同性愛に對する譏譽褒貶……………一六〇

第三項 哲學上の説……………一六三

第四項 心理學上及び醫學上の説……………一六五

第五項 發生學上の説……………一七一

第二節 先天的同性愛者の體格と性格及びその異性裝に對する心理……………一七二

變性的男女と同性愛及び異性裝者……………一七三

第四章 女裝男子の心理及びその實例

第一節 俳優としての女裝……………一七五

    第一例 曾我廼家桃蝶……………一七六

    第二例 市川松 葛……………一七八

    第三例 尾上多賀之丞……………一八〇

第二節 迷信の女裝……………一八三

第三節 人目を避けるための女裝……………一八三

第四節 性格に依る女裝……………一八〇

    第一例 荒 ○ 繁 ○ 十九歳……………一八四

    第二例 八木澤清吉 三十一歳……………一八七

    第三例 杉山芳子 十九歳……………一九三

    第四例 椿 紅 子……………一九六

第五例 堀江 笑子 二十八歳……………一八八

第六例 青木しづ子 十九歳……………一九八

第五節 嗜好に依る女裝……………二〇〇

    例 田 中 茂 十九歳……………二〇〇

第六節 享樂に依る女裝……………二〇三

    第一例 心字池の丘に夜毎跳梁する怪しの男……………二〇三

    第二例 エンコのお嬢さん……………二〇八

    第三例 二人の女裝少年……………二〇九

    第四例 女裝の男藝者磯節の兼ちゃん……………二一一

    第五例 小笠原兼松 二十一歳……………二二三

    第六例 車次 久一 三十三歳……………二三四

    第七例 間……………三三一

第五章 變裝及び異性生活を喜ぶ心理……………三九

第一節 男裝女子の心理及びその實例……………三三

第一例 彫刻家○谷初子……………三三一

第二例 マリー・アンダーセン……………三四一

第三例 鈴木つる 十六歳……………三四四

第二節 悔りを防ぐための男裝……………三四八

第三節 女の軍人……………三五〇

第四節 職業戦線上の男裝女子……………三五三

第六章 無差別期に於ける同性愛及び混淆性……………三五四

第一節 小兒の同性的愛情……………三五四

第二節 無差別期に於ける同性愛を経験したる二青年の例……………三五六

第七章 差別期に於ける男性戀愛及び女性戀愛……………三六七

第一節 意義、性質及びその性的感情……………三六八

第二節 その女子及び稚兒を愛せざる原因……………三六九

第一例 三十歳の男子……………三五七

第二例 三十四歳の男子……………三五九

第三節 無差別期に同性愛を感じたる青年婦人……………三六二

例 二十六歳の女子……………三六二

第四節 混淆性同性愛……………三六四

第一項 男子の混淆性同性愛……………三六四

例 二十九歳の男子……………三六四

第二項 女子の混淆性同性愛……………三六五

例 三十六歳の婦人……………三六六



第一項 女子に對する曲解或ひは誤解……………二七一

第二項 迷信に依る女子の排斥……………二七三

第三項 女子に對する嫌惡の強迫觀念……………二七四

第三節 精神的性交不能……………二七六

第四節 差別期に於ける女性戀愛……………二七九

第一項 その性格及び體質……………二七九

第二項 處女に戀ひするウラニスム……………二八〇

例 五十五歳の女子……………二八〇

第三項 ウラニスムと男性的女子との中間者……………二八五

例 二十六歳の夫人……………二八六

第五節 異性的變化……………二八八

第一項 女性的男子の意義及びその性格……………二八九

第二項 女性的男子の性的感情……………二九〇

第三項 女性的男子の例……………二九一

第一例 三十一歳の男子……………二九二

第二例 二十四歳の男子……………二九四

第三例 中年の官吏……………二九五

第四項 男性的女子の性的感情……………二九五

第五項 男性的女子の性格及びその服裝——藝術等に對する趣味……………二九六

第六項 男性的女子の例……………二九八

第一例 二十五歳の未婚婦……………二九八

第二例 二十六歳の婦人……………二九九

第八章 異性化……………三〇二

第一節 女性化又女化……………三〇二

例 三十歳の男子……………三〇四

第二節 男性化又男化……………三〇八

例 三十八歳の未婚婦人……………三〇

第九章 後天的同性愛又同性間性慾……………三三三

概 説……………三三三

第一節 男子に於ける後天的同性愛……………三三六

第一項 意義及びその性的感情……………三三六

第二項 性的行爲としてのソドミー及びペデラスチーの意義並びに

ソドマの滅亡に關する神話……………三七

第三項 現代に於ける男性間同性愛の流行……………三一

第二節 女子に於ける後天的同性愛……………三三三

第一項 女性愛と男性愛との比較……………三三三

第二項 女性間戀愛の著しく見えざる理由……………三三五

第三項 女性間戀愛の男性間戀愛よりも多い理由……………三三六

第三節 女性間戀愛と單なる友愛とは如何に異なるか……………三三八

第四節 有閑婦人の同性愛……………三三三

第五節 妻同志に於ける同性愛……………三三八

第六節 女囚徒間に於ける同性愛……………三四一

第七節 花柳界に於ける同性愛……………三四三

第八節 賣笑婦に同性愛の多い理由……………三四七

第九節 賣笑婦の體格異常と同性愛……………三五〇

第貳篇 變態性慾の現象及び人間の

獵奇性と殘忍性……………三五三

第一章 性生活の社會に及ぼす影響……………三五三

第一節 性慾の本旨……………三三三

第二節 性慾の衝動と技巧……………三五七

第三節 各種の民族に於ける性慾觀と原始的なる男女の交會……………三六〇

第二章 大名の獵奇生活……………

第一節 馬鹿殿の變態性慾……………三六四

第二節 諸候の賤しき遊び……………三六八

第三節 狂言好野暮大名……………三七一

第四節 文武二道の萬石通……………三七六

第五節 獵奇からサド性への移行……………三八〇

第三章 變態性慾の大衆化……………

第一節 人心の變態的惡化……………三八三

第二節 大衆を相手とする文藝……………三八六

第三節 ワイルドのサロメ……………三九〇

第四節 アンドレーフの獸の呪ひ……………三九四

第五節 變態性慾に興味を有する諸家……………三九七

第六節 日本の文藝家及び活動寫真に現はれたる變態……………三九九

第四章 怨歌行……………

概 説……………四〇四

第一節 島原の亂……………四〇五

第二節 忍姫の運命と新八郎の殘忍……………四〇七

第三節 下寺磔の刑場にならぶ囚徒……………四一〇

第四節 刑場の攪亂……………四一三

第五節 サド性の發露……………四一三

第五章 儀式化せる戀愛又は同性の變態……………

第一節 戀愛祭としてのお籠り……………四二七

第二節 庚申待又は盆踊り等の夜に於ける赤繩の結び……………四二二

第三節 盆踊りの習慣……………四三三

第四節 野蠻人の戀愛祭……………四三〇

第五節 セントジョン祭とヴィナス祭……………四三〇

第六節 鍋冠り祭……………四三四

第七節 尻打祭と水かけ祝ひ……………四三七

第八節 齒黒染めの習慣と後妻打ち……………四四〇

第六章 宗教及び道德と變態性慾……………四四三

第一節 宗教上より觀たる性慾……………四四三

第二節 性道徳……………四四八

第三節 風俗の壞亂と亡國的頹廢……………四四九

第四節 何故羅馬は滅亡した？……………四五二

第七章 常態性慾より變態性慾へ移行の徑路……………四五五

第一節 大都市の變態的性生活……………四五五

第二節 祕密の歡樂場……………四五八

第三節 犠牲とその由來……………四六三

第四節 犠牲を虐待して悦ぶ心理……………四六五

第五節 西班牙の宗教裁判……………四六九

第六節 群衆の變態心理……………四七三

第八章 殺人興味……………四七六

第一節 人命を弄する變態性……………四七六

第二節 人命を弄する勿れ……………四七八

第三節 織田信長の残忍享樂…………… 四八一

第四節 竹生島參詣と留守居の女房達…………… 四八四

第五節 荒木村重の一族に對する慘刑…………… 四八六

第六節 ラストモードの豊臣秀次…………… 四八九

第七節 辻 斬 り…………… 四九三

第八節 試し 斬 り…………… 四九五

第九節 復讐と決闘…………… 四九八

第九章

病的殺人と迷信殺人及び人肉嗜好乃至は薬用としての殺人…………… 五〇〇

第一節 病的 殺人…………… 五〇〇

第二節 狂人の妻殺しと怨みの情婦殺し…………… 五〇三

第三節 迷信的殺人…………… 五〇七

第四節 人肉食用としての殺人…………… 五〇八

第五節 薬用又は儀式としての殺人…………… 五一

第十章

變態的なる拷問と慘刑…………… 五二四

概 説…………… 五二四

第一節 拷 問…………… 五二四

第二節 劊手の變態性と覆面…………… 五二九

第三節 死刑に對する觀衆の感興…………… 五三四

第參篇

反生理及び反社會的なる變態性欲…………… 五三九

概 説…………… 五三九

第一章 生理と性欲及び月經…………… 五三九

第一節 性慾と自慰……………五三〇

第二節 性慾と過房……………五三一

第三節 月經中に於ける房事……………五三四

第四節 月經と萬引……………五三七

第五節 月經と種々な性的詐欺……………五四〇

第六節 月經と放火及び殺人……………五四三

第七節 月經障害と法醫學……………五四七

**第二章 妊娠、産褥及び病中に於ける房事……………五五〇**

第一節 妊娠中に於ける房事……………五五〇

第二節 産褥中に於ける房事……………五五四

第三節 病中に於ける房事……………五五六

**第三章 年齢の男女懸隔又は幼老に於ける性慾の變態……………五五八**

第一節 男女の相當せる生活年齢……………五五八

第二節 年少の男子と年長の女子……………五六一

第一項 奇しき戀……………五六二

第二項 未亡人と少年……………五六四

第三項 奥さんと少年……………五六七

第四項 駈け落ち、情死、結婚……………五七一

第一例 女は三十九歳の人妻、男は二十歳の青年……………五七一

第二例 女は五十一歳、男は二十三歳……………五七三

第三例 女は六十八歳、男は二十一歳……………五七三

第五項 竊盜、不倫、姦通と殺人……………五七四

第一例 女は六十六歳、男は三十九歳……………五七五

第二例 女は三十八歳と十九歳、男は二十七歳……………五七五

第三例 女は四十八歳、男は二十五歳……………五七六

第四例 女は四十一歳、男は二十一歳 ..... 五七六

第五例 女は三十七歳、男は二十歳 ..... 五七七

第三節 年長の男子と年少の女子 ..... 五七七

第一例 男は七十七歳、女は二十二歳 ..... 五七七

第二例 男は四十七歳、女は十八歳の娘 ..... 五七八

第三例 男は六十四歳の下足番、女は十八歳の女給 ..... 五七九

第四例 男は七十六歳、女は十七歳 ..... 五七九

第五例 男は七十二歳の寺男、女は二十八歳の仲働き ..... 五八〇

第六例 男は七十歳の技師長、女は四十五歳の妻と十八歳の女中 ..... 五八一

第七例 男は七十二歳の魚商、女は二十五歳の娘 ..... 五八二

第八例 男は五十四歳、女は十九歳の人妻 ..... 五八三

第九例 男は六十歳、女は十四歳の娘、而も子を生む ..... 五八四

第十例 八十歳の男 ..... 五八五

第四章 偉人の顛倒年齢と兄嫁又は弟嫁を娶る習俗 ..... 五八七

第一節 富翁と少女 ..... 五七七

例 男は七十七歳の富翁、女は十七歳の處女 ..... 五八七

第二節 偉人の天才的戀愛 ..... 五九一

第三節 幼年と幼女 ..... 五九四

第四節 兄嫁又は弟嫁との結婚 ..... 五九七

第五章 天才と戀愛 ..... 六〇一

第一節 天才は一種の變態 ..... 六〇一

第二節 狂熱的戀愛 ..... 六〇三

第三節 移り氣多き戀愛 ..... 六〇七

第四節 多情の戀 ..... 六一三

第五節 華美と誇大なる戀…………… 六二六

第六章 風俗と羞恥感及びこれを紊す性行爲の罪惡…………… 六二九

第一節 風俗及び習慣の來由…………… 六二九

第二節 近親間に於ける性慾…………… 六三三

第三節 バイブルに現はれたる子と父…………… 六三六

第四節 タマルと舅父…………… 六三〇

第一項 寡婦となれるタマル…………… 六三〇

第二項 面衣を覆ふて公園を徘徊するタマル…………… 六三三

第三項 タマル舅父の意に従つて孕む…………… 六三四

第四項 タマルの審判…………… 六三六

第五項 タマルは果して子を得るためであつたか…………… 六三七

第五節 利未記に現はれたる邪淫戒…………… 六三九

第七章 變態性慾としての血族結婚に関する考察…………… 六四二

第一節 血族又は姻族に對する性的感情…………… 六四二

第二節 原始時代に於ける血族結婚と女子の性的感情…………… 六四五

第三節 血族結婚の嫌厭されたる理由…………… 六四八

第四節 文化史上より觀たる血族結婚…………… 六五〇

第五節 禁婚と許婚とに關する範圍及びその例…………… 六五〇

第六節 同姓結婚を禁ずる種族…………… 六五八

第七節 日本の同姓結婚…………… 六六一

第八章 變態性慾としての一妻多夫に関する考察…………… 六六三

第一節 結婚の原則に反する一妻多夫…………… 六六三

第二節 同胞式一妻多夫とこれを採用せる種族…………… 六六七



第三節 同胞式としての標準とせらるゝ西藏の一妻多夫…………… 六六九

第四節 一妻多…に於いて定められたる夫の數…………… 六七三

第五節 申命記に現はれたる亡兄の妻と弟との結婚…………… 六七五

第六節 印度傳説ゾローパチー姫と五人兄弟の夫…………… 六七七

第七節 正夫と補夫との權力及び父と叔父との區別…………… 六七九

第八節 從兄弟を合はする一妻多夫と群婚…………… 六八三

第九節 異胞式の一妻多夫…………… 六八五

第十節 平安時代の結婚と英國のチャールス二世時代の淫風…………… 六八八

### 第九章 無羞恥と變態性欲…………… 六九〇

第一節 羞恥感は何うして起るか…………… 六九〇

    第一項 無羞恥より羞恥感へ…………… 六九〇

    第二項 羞恥感の起源…………… 六九二

第三項 裸體藝術に對する感情…………… 六九三

第二節 裸體の對象物に依りて生ずる羞恥感の消失…………… 六九五

    第一項 蛇 使 ひ…………… 六九五

    第二項 蛇 の 藝 當…………… 六九七

    第三項 西洋の蛇使ひ姫…………… 六九八

第三節 羞恥感の發達…………… 七〇一

第四節 素人の性生活…………… 七〇四

第五節 性的玩具としての女性…………… 七〇八

第六節 性交を恥ぢないものと、之れを恥づる種族…………… 七一

### 第十章 裸體と羞恥…………… 七四

第一節 蠻族の裸體生活…………… 七四

    第一項 裸體生活の階級…………… 七四

第二項 第一階級の裸體……………七六

第三項 第二及び第三階級の裸體……………七七

第二節 西洋婦人と日本婦人と孰れか羞恥感に富めるか……………七二

第三節 裸體から着衣へ——夏の夕に於ける海岸……………七五

第四節 キャンプの喜劇とレヴュー・ガール及び水着無しの海水浴……………七七

第十一章 高師直と久米仙及び一休禪師……………七三

第一節 顔世の湯上り姿に魂を失つた師直……………七三

第二節 久米仙の空中墜落……………七六

第三節 一休禪師の裸女禮讃……………七八

第十二章 變態性慾としての姦通……………七四

概 説……………七四

第一節 姦通の意義及びその種類……………七四

第二節 合意的姦通とその例……………七四

第三節 脅迫的姦通とその例……………七四

變態性慾の概括及び結論……………七五

第一節 豫防に就いての考察……………七五

第二節 適當なる結婚奨励……………七五

第三節 不適當なる結婚の禁止又は制限……………七五

第四節 危険なる變態性慾者の隔離……………七五

第五節 性的犯罪豫防としての去勢法……………七六

第一項 去勢すべき不良者の種類……………七六

第二項 低能及び不良性の豫防とその去勢……………七六

第三項 私生兒豫防としての去勢……………七六

第四項 去勢法の適用と種類 ..... 六九

第五項 去勢現象に關する實例 ..... 七三

    第一例 男 三十歳 ..... 七三

    第二例 男 三十三歳 ..... 七四

    第三例 女 三十六歳(未婚) ..... 七五

    第四例 女 三十五歳 ..... 七五

第六節 禁酒又は節酒の勵行と花柳病の防遏 ..... 七六

    第一項 酒と精神障害及び變態性慾との關係 ..... 七六

    第二項 花柳病と精神障害及び變態性との關係 ..... 七六

    第三項 花柳病の豫防 ..... 七九

結論 ..... 七八〇

目次終

緒論

人間の異性に對する性的感情 Sexualfeeling. 及び戀愛の情操 Sentiment of Love. は、本能(天性ともいふ)の發露したものであつて、その現象は種々であるけれども、元に遡れば、みな自然的に、同じ型に造られたものであることは、動物の性慾状態に於いて見るが如く、劃一的のものなりしならんと、想像するを許さなければならぬ。

これを具體的に言ふと、男は女に對し、女は男に對して、互に思ひを寄せ、心を焦して、愛慕の果ては、遂に相接し、相觸れて、そこに兩者が、結合するに至るが如く、自然の徑路を辿るのである。

斯くして男女の接觸、結合の結果が、自然の法則に従つて、妊娠となり、分娩となつて、産兒を見るに至るのである。これが性的感情及び生殖の常態なるものであつて、この性的感情を普通に性慾 Sexual desire. といひ、その發露又は行爲を、性的現象 Sexual Phenomenon. と名づけてゐる。性生活は、性的現象の順調にして、而も自然の要求に適應した行爲の一つなのである。

然るに往昔我々の祖先が、營んでゐた生活時代が移り、文化が進んで人間の生活に、不安を來たすやうになると、性慾もそれにつれて、不安となり、かくして最初の自然的なる性慾も、生殖も、順調に行はれ得ざる破目となるものが多くある。何故といふに、如何に性慾は本能なりとしても、生活に支配される以上、生活問題のために、攪亂されることが多いからである。特に、人口の増殖に伴ふて生ずるところの、生存競争 The Struggle for Existence が、烈しくなれば、烈しくなる程生活が脅かされて、性慾を満足し、又は完ふすることを得ざる結果、そこに變調 Trans for nation. を來たすは、數の免れざるところである。

此の自然的性慾及び生殖に對する妨礙 Disturbance. には、色情異常や、色情倒錯等の如き病的のものもあるが、普通に知らるものは、

- 一 結婚難、(結婚することを得ざるもの。)
- 二 性慾の禁壓、(性慾を禁壓されるもの。)
- 三 性的恐怖、(異性を恐るるもの。)

の三種であつて、孰れもみな性慾に、大なる變調を來たすものである。此れ等は單に、變態性慾の原因となるのみならず、社會問題としても、重大な關係があるにより、先づ大體説明しやうと思ふ。

うと思ふ。

### 第一節 結婚難

結婚難とは、結婚期になりても、或る事情のために、満足に結婚することを、得ざるもの謂ひで、それが男女の焦慮、煩悶の原因となり、その結果として來たるものは、好ましからぬ現象である。即ち老郎又は老嬢の如き獨身者の、多く出づること、我が國には尠いが、歐米諸國には極めて多くある。

併しそれはまだ、止むを得ずとしても、忍ぶべからざるものは、煩悶して精神異常 (die Geistesstörung) を來たすもの、或ひは悲觀の餘り、厭世して自殺、又は情死するものなどで、この種のもものは、我が國に甚だ多くある。

此れ等の結婚難にも、種々事情の伏在するものあることは、言ふまでもないが、その主なるものは、生活難と家庭の事情とである。前者は生活をつなぐために、子女の結婚を、犠牲にするもので、後者は両親の不同意、若くは家繼ぎの獨一子なる等の場合である。情死にはこの種のものが多い。

第二節 性慾の禁壓

性慾の禁壓とは、性慾を禁絶し、或ひは壓迫するものの謂ひである。これに自發的に禁壓するものと、外部から強ひられて、餘儀なくするものと、の別がある。修道のために禁慾するものは、自發的

第一圖



宗教的色情隷屬

あるけれども、牢獄の拘禁、永住の奉公、遠征、長途の旅行等の類は、外部的に屬し、色慾を、器械的に絶たれたものであるから、長くつゞくと、遂には性慾に異常を來たして、これを行爲の上に、現はすやうになることが多い。

永住の奉公といふのは、外國によくある奴隷のことで、歐米にては黑人を生涯苦役したことは、歴史に残つてゐる。米國の南北戦争は、奴隷の廢止問題から起つたもので、その結果奴隷は一般に解放されたが、今日でも奴隷は絶たれてゐない。斯く自由を束縛された彼れらは、性慾に變調を來たして、或ひは亢進し、或ひは狂崇状態となつて、白婦人に暴行を加ふるに至ることもある。

日本にては昔の封建時代に、大名の奥に使はるる老女といふものは、生涯飼ひ殺しの制になつて、多くは奥方に付き、旁々奥の取しまりをしたものであるが、配遇者なく、異性に接したこともないので、温情愛慾の念に乏しく、その心は妙に執拗となり、人を人と思はぬやうになるのが、殆んど一般の常態であつた。

又異國の遠征に赴き、或ひは長途の旅路に、家を空しうするものなども、一時的ではあるが、異性に對する情操が、著しく亢進する餘り、性的に異常を來たすことがある。同性愛の如きは、さういふ場合に發すること多く、昔の戰場などには、敵國の婦女に暴行を加へることが多くあつた。

今日にても外國航路の汽船にて、數ヶ月も洋上を航する船員の中には、怪しき話を聞くこと

が少くない。船長の秘愛する人形、船員同志の愛慾などは、その例で、異性に渴する結果と見

第二圖



船長の人形の愛する

これと同様に、家を守る妻にも、異常が来る。長き空閑に、寂寞を感じるは人情で、誰も同じであるが、婦徳の乏しい

もの、或ひは意志の薄弱なるものなどは、邪な心に襲はれて、正しからざる行ひをなし、或ひ

は家畜を愛して、慰藉とするものもある。

次に、自發的なる修道者に就いて見るに、

修道に固まつて、心を信念の一方に注ぐときは、

心頭性慾を滅する傾きがあるけれども、釋尊や

基督等の如く、大悟徹底せざるものには、生半

可の禁慾より、却つて性慾に變調を來すものが

少くない。女人禁制の寺僧、修道院の尼などに

も、さういふ例がある。

第三圖



狎愛する女

それから牢獄に囚はれて、久しく異性に接せざる犯罪者にも、性的に煩悶するもの珍らしからざるは、事實の證するところである。これ異性と隔離したる場合に生ずる現象で、異性に對する狂崇感が、非常に嵩まり、それがさながら、飢へたるものが、食を選ばざるが如き状態となる。

### 第三節 性的恐怖

性的恐怖とは、性慾に對する恐怖のことで、此の中には亦、異性恐怖、性愛恐怖、妊娠恐怖等の種類がある。多くは羞恥心と潔癖性と關係があつて、醜惡の想像と結びつくときは、性的恐怖症となつて、異性を嫌厭するやうになる。男に見る女嫌ひ、女に見る男嫌ひは、此の一種で、同時に性交恐怖を伴ふものである。

性的恐怖は、同性愛にも見る現象であるが、一般に男よりも女に多い。結婚の初夜に於ける花嫁の羞恥と恐怖とは、神経を亢奮して、痙攣を發せしむることあるは、人の知るところで、それが性交恐怖の原因となるのである。男にも稀れに、童貞の際に、女を恐ることがある。併しそれは一時的で、男には病的なるもの外には、長くこの現狀を維持することはない。

終りの妊娠恐怖は、女に許り存するもので、それも稀有である。一般に於いては、女子は生殖を謳歌して、これを希望するものであるけれども、人に依つては妊娠の苦痛を想像して、これを避けんと欲するものもある。

これは眞の妊娠恐怖であるが、時には妊娠すべからざる境遇にあるもの、例へば未亡人、處女等の如く、純潔であらねばならないものが、不心得にも貞操を破る場合には、第一に妊娠を氣づかひて、之れを恐るること甚しく、その結果、妊娠した時の徴候を現出することがある。夫婦の間に於いて、妊娠を恐るるものは、性交を厭ふて、夫婦の和合を缺き、それが原因となつて、破鏡の歎を見ることもある。かつて或る婦人は、愛情に於いては、極めて濃厚であつたが、妊娠を怖るる許りに、不自然な行爲を要求し、夫もそれに慣れて、睦ましく連添ふて來た例もある。

#### 第四節 性慾異常の種類

以上に説述したる事實は、性慾に異常を來たすもので、いづれも不自然なるものであるが、その結果として、普通に多く現はるるものは、

- 一 自慰的行爲、
- 二 同性間性慾又は同性愛、
- 三 色情亢進より起る暴行、
- 四 異性の毛髮、被服物等に對する性的狂崇、
- 五 食尿症又は食尿症、

であるが、此の外に

- 六 露出狂、
- 七 異性に對する復讐的暴虐、
- 八 屍 姦、
- 九 獸 姦、

等も少くない。これらはみな、本論に詳述するつもりだが、便宜上こゝにその梗概を解説するとしやう。

自慰とは、不自然的に、自ら性慾を満たす行爲の謂ひで、青春時代に多くあるが、中年以後にても、獨身者などには、これを常習とするものが少くない。同性間性慾又は同性戀愛は、異

性との交際を絶ち、又隔離されたる等の場合に起るもので、自慰と關係がある。之れを要するに、性の禁壓から生ずるもので、家畜などにも、雌雄を隔離して、別々の牧場に飼ふときは、自慰に似たことを行ひ、又は同性に向ふこともあるは、牧畜家の經驗するところである。

次ぎは異性に對する暴行で、色慾の亢進より起るものが、原始的と考へらる。異性の毛髪被服物等に對する性的狂崇も、性慾の禁壓より生ずるもので、僅か數本の毛髪が、異性の聯想となり、又は斷片的の被服も、同様の感情を激發するものである。

食尿症及び食尿症は、前者の一種で、狂崇が極度に亢進すると、異性の排泄物を食して満足するに至るのである。

露出狂も元は、性の禁壓から來たもので、性慾が盛んなのに、これを満たすことを得ざる結果として、自ら露出し、或ひは猥褻なる行爲を演じて、樂しむやうになつたのである。

それから異性に對する暴虐も、原因は初め性の壓抑又は禁斷にあつて、その結果、嫉妬、猜忌、偏執等、變態心理に陥つたのである。かくして、異性を虐待するのは、復讐的に出づるのであつて、中には殘忍を事とするものもあるが、多くはこれをもつて、性慾を満足し、甚だし

きはこれを慘殺して、快となすものもある。

屍姦及び獸姦も、性慾から轉向したものである。屍姦は死者の靜寂に變つた姿に、興を咬るもので、昔の戰場などに多く行はれたことは、文獻にも傳へられてある。獸姦は異性に對する望みを、獸畜に向けたもので、外國に多くある。

まだ種々の獵奇性慾があるけれども、追々に述べるとして、何れもみな、自然的性慾の妨碍、又は禁壓より來たれる倒錯性慾なのである。さういふ者は、性的感情からして、既に常人と異つてゐる。性感異常といふのはそれであるが、此の外に、もう一つ女性にのみ發する障

碍がある。それは生殖不能より來たるもので、女子は子を得ざる時は、懊惱すること甚だしく、特に愛兒を失つた場合などには、精神に異常を來たすこともある。近松の作「雙生隅田川」にある吉田の少將藤原行房の愛妾班女の前が、梅若丸の行方を探がして、はるく京より東に下り、隅田川原にて狂亂の態を晒したのは、哀れにも悲しき限りである。

Transformic Sex. (Parado xia sexualis, psychopathia sexualis.)

第五節 變態性慾の意義、原因及び症狀



自然的であるべき筈の性慾が、事情に依つて倒錯となり、その結果として現はるる變調を、今日の科學者はこれを變態と名づけて、すべてかういふ種類の性慾を、一まとめに纏めて、これを變態性慾といふ大きな部類に、包括したのである。換言すれば自然的なる常態の性慾に對して、變態性慾といふのである。

此の事實に依れば、變態性慾は常態性慾から轉向し、或ひは變化したものと云ふことになるが、これは何ういふ理由かといふに、古昔にも、性慾の満足を得られざりし時代があつたであらう。するとその結果として、前に掲げたやうな、種々の變態性慾者が現出したものと、看做さなければならぬ。而してさういふ異常なる感情の性質が、子孫に遺傳するものとすれば、その子孫は、生れながらにして、變質者であることは、首肯しなければなるまい。

勿論、結婚難や性慾の禁壓を受けてゐる者に於いては、子を設くることは無い筈だけれども、又何ういふ機會があつて、生殖を遂げ得ることがないとも限らぬであらう。とすれば長い間の中には、さういふものの子孫が多くなり、それが漸々に増加して、今日見るやうに先天性の變態性慾者が、現はれたものと、看做すことを得るであらう。

變態性慾に先天性と、後天性との別ある理由は、如上の説明で明白である。これは獨り、變

態性慾のみ限つたわけではなく、人間の性質や體質、若くは感情等あらゆる心性は、みな祖先から遺傳されたもので、精神病なども、初めはみな祖先の精神異常から、傳へられたものに違ひない。普通の變態性慾の外、精神病者に發する色情異常の如きは、さういふ状態の下に、祖先から來たことが、推知するに難くない。

それから大切なことは、變態性慾の症狀に、輕重と強弱との差のあることである。輕症は微弱で、殆んど常人と異ならざるものもあるが、重症は烈しく、何人の目にも着く。これ等には最初からなるものもあるであらうが、長い間輪流し來る間に、遺傳力に強弱を生じて、或ひは重く、或ひは輕くなつたものもあるであらうと、想像さるる。

して見ると、症狀に輕重の差こそあれ、變態性慾者の、比較的多く世に存することが知られるし、又常人と思ふ者の中にも、變態性慾の加味してゐるもの、少くないことも、察せらるるであらう。

さういふ常人、若くは輕症の變態者は別として、重症の患者になると、根本的に常態性慾に背いて、之れを破壊するに依り、彼等は性慾の反逆者と謂ふことを得る。随つて生殖を不能ならしめて、家庭の不幸となるばかりでなく、社會的にも大なる禍ひをなすこと、言ふまでも

ないところである。

斯くの如く變態性慾は、常態性慾と異なり、徹頭徹頭危害があつて、犯罪の原因となることも多いところから、近來變態性慾の研究が、刑事方面に多大の貢獻を爲すやうになつた。醫學教育及び文藝方面に於いても、變態性慾の研究して、その原因、現象及び治療法等を講ずることとは、専門家以外にも必要であること、多言するに及ばぬ。

誰が變態性慾者を作り出したか。一つは先天性で、一つは後天性であるが、後天性は社會の制度が完備してないために、起るのである。先天性といへども、その源に遡れば、矢張社會状態が、悪かつた結果であること、如上の説明で明瞭であるとすれば、恰も醫師が、病患者を治するときの如く、我々は變態性慾に對して、性科學、醫學、心理學及び犯罪學等の上から、眞摯に研究の歩を進めて行かなければならぬ。

緒論はこれで終つた。直ぐに總論に入つて、流行性を帯ぶる變態性慾と、世相及びその研究法とを述ぶるであらう。

X X X X X

### 總論

## 第一章 流行性を帯びたる變態性慾

### 第一節 露骨と變態との尖鋭化

近代の流行語で、エロといひ、又グロといへば、耳新らしく聞こえるが、決して近代に始まつた語ではない。これは遠い昔から、人間に傳つて來たれる、性的感情の發露したものであることは、言ふまでもないが、それが近代に至つて、著しく露骨となり、更に變態に傾き、且つは次第に濃厚の度を加へて、異彩を放つやうになつたのであることは、注意すべきことである。ところで、異彩を放つといへば、何か美しい情景のやうに、聞こえもするし、又、さう考へられもするが、ここに謂ふ異彩とは、さういふ美妙な情景ではなく、さなきだに不自然であつて、而も嫌厭に堪えざる變態的な性慾の、一層尖鋭化したもので、謂ゆるエロ、グロの混淆した世の中となつたといふことなのである。

さういふ譯で、或る者は、エロ的のものでないと、共に語るに足らずとなし、又、或る者はグロ的のものにあらざれば、採らないなどと云つてゐる。此のエロとグロとこそは、全く近代的な傾向で、その見るもの、聞くものすべてが、殆んどみな、此の新傾向を、帯びたものにあらざるはなく、その歴々として、披瀝さるる事實も、數ふるにいとまなない程、多く、普遍的となつて來た。

可笑いことは、近代に、謂ゆる近代化 Modernize せる名詞や、代名詞等の、甚だしく魅惑的となれる反面に、滑稽味の加はつて來たものの、多く現出したことである。即ちエロロはエロチシズム Eroticism の略語で、エロチシズムといへば、セックスの事といふやうに、學術的に聞こえるが、之を略して、單にエロといふと、極めて春的なものやうになつて、何となく、卑猥な感がする。

又、グロ Gro も、グロテスク Grottesque の略語で、グロテスクといふよりも、單にグロといふ方が、好奇心を唆るやうに思はれてならぬ。

そこで此のエロとエロチシズムと、又、グロとグロテスクと、どちらもその意味に於いては、違ふところはないが、併し頭字ばかり取つて、あとを略して了うと、何だか附號か、或ひは隠

語かのやうになつて、非常に挑發的のものとなるのは、時代の尖銳化に伴ひ、無闇に濫用された結果である。換言すれば、文字をコンデンスして、淫猥を暗示したからである。

斯様に、此のエロ、グロなる略語の用ひ方こそは、たしかに近代的傾向の、生んだ新語である。

第四圖



の者は勿論、普通の人達の間にも、此の新語を口にしないと、近代化しないやうに、取り受けらるるところから、謂ゆる猫も杓子も、エロ、グロを盛んに、使ふやうになつた。

流リパの優女は書き立てるし、讀者もこの新語がないと、興味が薄いやうに感じらるのである。學生やその他の、インテリ方面

新聞の案内廣告などでも、エロ、グロを發揮しないと、効果がないと見え、エロサーピスだの、エロ奉仕だのといふ看板を出したために、警察署に呼ばれて、説諭された店のあつたことが、一昨年あたりの新聞にあつたことを、記憶してゐる。

何でも、エロ、グロでなければ、流行らないためであらうが、甚だしきは花柳界の案内廣告に、エロのサーピスで、グロの御歡待をすると、いふやうなものまで、現はるる時代となつた。ところが獨りエロと、グロとばかりでなく、その他にも、これに似た例が多くある。彼のハイカラといふ言葉は、今は餘り使はなくなつたが、十數年前までは、よく用ひられたものだ。その後、モダンといふ新語が、これに代つて、少し文化的のものには、直ぐにモダンなる名を與へるやうになつた。モダン・ガールや、モダン・ボーイは、その産物で、それ等もコンデンスして、モガ又はモボといふやうになつたから可笑い。何といふ言葉の、移り變はりであらうよ。

## 第二節 辛烈なる興味を要求する近代人

かく時代と共に、新語の多く出て來るのは、時の流行で、獵奇を好む人心の傾向から、助成

せられたのである。これを見ても、人間には本來的に、獵奇を好む性質の、潜んでゐることが判明する。あらゆる人の、殆んどすべてが、何でも常態なるものよりも、變態なるものの方を、より多く好むのも、これがためであることが知らるる。

そこで世の中が、何が故に、かゝる風潮になつたか、その理由を考へて見るに、種々の原因もあるであらうが、一言にして盡くせば、近代人の生活が、何に依らず倦怠して、氣力に消沈を來たした結果と考へらるる。それで更に、新なる生活に入つて、興味を求めなければ、満足が出来なくなつた。即ちエロとグロとの飽充したもので、さういふ人を引き立てるには、何でもびり／＼と、刺戟のある亢奮劑でなければならぬところから、さういふものが、必要となつて來たのである。

ところで又、その刺戟にも、種々あつて、昔のやうに、少しの刺戟にも、直ぐ感激して、陶酔するやうなものは、今日の時代では、生温くして、役に立たなくなつた。それは近代人が、常に環境から、受くる影響のために、知覺神經が麻痺して、少し位の刺戟では、感じなくなつたからである。

これを喻へていふと、恰度新婚時代から、倦怠期に入るやうなものであらう。新婚當時の樂

しかりし夢が、何時までも續く筈がなく、半年と経ち、一年と過ぐる中に、そろ／＼倦怠を來たして、興味を失ふやうになるのは、押しなべての状態である。

社會人心の趨くところも、これに似て興味が盡きると、もつと面白いことがないかと、求めて止まない結果は、エロ、グロに走るやうになる。故に家庭には、美しい妻があるのに、物足らなくなつて、他所の女に心を寄せたり、或ひは花柳の巷に出入して、浮き名を流すやうにもなるのである。

實際さういふものの、世間に少くないのは、人の知るところであらう。中には新婚からして早くも待合遊びをしたり、賣笑婦に現を抜かして、新妻を顧みないといふものさへある。随つて又さういふ遊蕩兒を、主材にした小説や、講談ものも多くある。

小説は、一面社會の反映であるから、小説家が、材料を實社會に求めるのは、當然である。或る小説家が、戀ひし合つた男女も、長く同棲してゐると、倦怠が來る。夫婦の反目や、衝突から、家庭の破壊するのも、これがため、破壊がないまでも、夫婦の倦怠は、免れないと謂つたのは適言である。

さういふ理由にて、多情な男や、移り氣の者になると、美しい妻も、何時しか鼻について思

所の花が好ましくなり、或ひはそれに戀して、新なる興味を、趁ふやうにもなるのである。かういふ例は、極めて多く、一々枚舉にいとまないが、一、二の例を舉ぐると、こんなものがある。

某家の息子が、是非ともあの娘をと、執心して娶つた新妻を、半年と経たぬ中に、疏するやうになつた。これは友人と、飛鳥山へ花見に行つたときに、その友の細君の、親戚のものだといふ娘に、ふと思ひをかけ、それからその方に心を奪はれて、家の妻は見向きもしないやうになつたのである。

又、某家の長男が、放蕩で藝者狂ひをするので、両親が心配して、嫁をもたせたらと、親戚に頼んで、美しい娘を貰つたが、當座の中ばかり、睦ましく、漸々に冷くなつて、再び以前の藝者に戻るやうになつた。

昔の人情小説を見ると、かういふ例はいくらかもある。次ぎに放蕩兒の昔噺しを記して見やう。

### 第三節 目前屋 理太郎

京傳の作で、「心學早染艸」といふ本、勸善懲惡を、骨子としたものであるが、こんなことが述べられてある。

日本橋の邊りに、目前屋理兵衛といふ有福の商人、その子を理太郎と名づけて、慈しみ育てたが、生まれつき利發で、親には孝、商業は勵むといふ、しつかりもの故、評判がよかつた。



理太郎吉原に遊蕩に耽け  
(心學早染草よ)

だが年頃でもあり、心浮き立つまゝを遊びを始めたのである。或る日、今日は浅草観音へ、参詣せんと志し、観音へ詣りそのまゝ、歸らんとしたが、つく／＼思ふやう、我れ今までは、吉原といふところ、見たことはないが、一度は見ても苦しがるまじと思ひ、うか／＼と、土手八丁へさしかゝつた。

理太郎は到頭吉原へ來たり、素見物して歸らんと思つたが、仲の町の夕景色を見てより、氣を奪はれ、とある茶屋を頼んで、三浦屋の怪野といふ、遊女を揚げて遊んだ。忽ち魂天上に飛んで、歸ることを忘れ、更に正氣はなかつた。  
『魂宙に飛んで、踊りををどる。』  
『あゝいゝ匂ひがする。岡本の乙女香といふ匂ひだ。』

『酒に明かさぬ夜半もなし。それが嵩じた物狂ひ。』  
『あゝ面白く。こんな面白いことを、今まで知らずにゐたが残念。』  
理太郎は快樂を盡くして、家へ歸らうとすると、怪野に引き止められ、そのまゝ居続けと流し、それから放蕩の限りをつくし、つひには悪事をするやうになつた。  
遊蕩兒は、上流階級に多いことも事實で、姦通や情死なども、かうした放蕩がもとで、起ることもある。近松巢林子の作にかゝる心中ものには、妻がありながら、放蕩が祟つて、金につまり、とど遊女と情死した経緯を、描いたものがある。

#### 第四節 徳兵衛とお房

近松の作で、「心中重井筒」といふのは、寶永元年四月十六日から、竹本座の初興行に上り、評判を取つたものである。その筋の概略はかうだ。  
徳兵衛は、大阪六軒町の遊女屋重井筒の主人が弟であるが、上野萬年町なる紺屋の主人に見込まれて、その家の一人娘お辰の婿養子になつたのである。養父は家業を、婿に譲つて隠居し、別宅に退いてから、店は徳兵衛夫婦で、營むことになつた。

夫婦の仲は、お定まりの如く、初めの中は睦ましかつたが、徳兵衛は兄の店へ行くことから、抱えの遊女お房と親しくなり、遂には深く言ひ交はして、離れ難くなつた。

然るにおふさの父は、由なき者の請人に立つて、金を借りたが、その證文に、若し金が返せなかつたら、娘のおふさを金のかたに、渡すといふ意味の文句を、かき入れたのが祟つておふさは何うしても、金を父の許に、送らなければならぬ破目に陥つた。

これに同情した徳兵衛は、おふさを救ひやうと、惱んだ揚句、悪いこととは知りながら、妻の不在中に、その印判を盗用して、詐欺的に金を他から借り入れ、その金をもつて、一時の急を救ひやうとした。

かゝることのあらうとは知らぬ妻のお辰が、家へ歸つて見ると、大切な印判が取り出されて、何かに押された様子なのに、怪しんでゐるところへ、お辰の父が隠宅から尋ねて来て、金貸から、こちらの御夫婦に、大金を御用立てしたが、念のためにお知らせしておくと、たつた今家へ来たが、何うも合點が行かぬ故、その事情を聞くに參つたと、いふのであつた。

お辰は、父の話しを聞くと等しく、さてはと胸に當つたが、夫に傷をつけまいと、一時をつくらひ、なほも夫は今、奥に寝てゐると胡魔化して、父を歸したところへ、戸の外で、父

とお辰との話しを、立ち聞きした徳兵衛は、不興氣に家へ入つて、奥に寝てゐると云つたのは間男であらう。俺は家を明けて、歸らないのをいゝことにして、好き勝手に、男を引き入れて楽しんでゐたであらう。こゝな不義者めと立腹して、荒々しく奥へふみ込んで、その寝てゐるものを見れば、姦夫でも間男でもない、我が子であつた。

これで徳兵衛の妻に對する疑ひが晴れると同時に、初めて妻の貞節と、我が身を庇ふてくれた真心も判明つて、心から後悔し、これまでの不心得を、涙と共に詫びたのである。

一念發起した徳兵衛は、女房を安心させ、二つには改心を證するため、借りた許りのその金を、返すべく持つて出たが、辻にて思ひ出し、女のところへ走つた。徳兵衛の意志の薄弱な、そして感情の熱し易いものであつたことは、これで知らるる。

一方兄夫婦は、お房を徳兵衛に逢はせまいとする。約束した徳兵衛は、來たらず、心當てにした金が手に入らず、進退谷まつて、死を決してゐるところへ、徳兵衛は來たが、すべては齟齬して、何にもならなかつた。お房にとつては、何うしても死ぬ外はなかつた。かくて二人は共に死出の旅に赴いたのである。

第五節 夫婦の倦怠期と不祥事

男ばかりでない。女も倦怠期になると、不祥事をかもすことが少くない。夫の目を忍んで、仇し男といふ仲になるものもあるが、これも倦怠から誘はるる心の狂ひである。妻の姦通が、若い時よりも、むしろ中年以後に多いのも、この理由である。

男の遊蕩といひ、女の享樂といひ、いづれもみな、頽廢せる社會の現象で、憂ふべきことであるが、併しその由つて來たるところの原因を、よく究めなければ、かゝる弊風を淨化することも、矯正することも、難かからうと思ふ。その由つて來たる原因とはそも何であらう？

或る人の説に、人の倦怠期に入るのは、心理上免れざるところで、その期に達すると、獵奇に走り、新興味を求むるやうになるが、道徳心の高い人は、それを超越して、平和なることを得るけれども、道徳心の低い、又は薄弱なる者になると、それに征服されて、心に狂ひを來たすといふことで、あるが、これは至極眞理であると思ふ。

之れを要するに、人間には、生來的に獵奇性が潜伏して、機會のある毎に、擡頭せんとしてゐる。故に世間の萎靡、腐亂を豫防して、社會を淨化するには、人心に潜伏してゐる獵奇性に

刺戟を與へないやうに、注意することが肝要である。

斯様に近代人は、すべてに就いて、移り氣であると同時に、好奇的である。特に性的感情に對しては、著しく深刻になつて、自然的な順調の性慾から、不自然的な變調の性慾に、流れて行くものの甚だ多くなつて來たことは、前に一言した事實で、諒察さるるであらう。

なほ、これを具體的に言ふと、從來の自然的な常態性慾にあつては、物足らないといひやうか、それとも最早、飽き果てたといふのか知らないが、兎に角、性慾でも戀愛でも、古くさくなつた。その新らしく鮮な、そして極めて、モダン的な、或る感興を、加味したものでなければ、面白くないといふやうに、變つたものを、好愛する欲望が、近代人に烈しくなつて來たことは、掩ふべからざる事實である。

第六節 事實の概括

それで試みに、今、如上の事實を、概括して見ると、何うなるかといふに、大體、次ぎの如くすることを得る。

一 享樂的刺戟のために、近代人の神經が、麻痺して鈍くなり、それがために、更により



高き、強烈な刺戟でなければ、満足が得られなくなつたこと。

二 さういふ享樂を追ふ頹廢的空氣が、謂ゆる大衆を相手とする、讀み物の上にまで伸びて、公然歴々と、現はれて來たこと。

三 右と同様に、それがまた、活動寫眞の上にも、著しく現はれて來たこと。(この事實は後文に詳しくある)

四 探偵、又は犯罪小説の、材料となる殺人、暴虐などの、一しほ殘忍を極むるものの、甚だ多くなつたこと。

五 小説ばかりでなく、實社會も同様で、近來殘忍なる殺人の、頗る多くなつたこと。さつとかう分けらるるが、孰れにしても、決してよい傾向ではない。此の勢ひで進まば、仕まひには、果して何うなるであらうか、本統に、破壊的な頹風が、來襲しないとも限らぬ。

然るに又、或る人は、こんなことを言つてゐる。

そんなことは、問題とするに足らぬ。時代の傾向といふものは一時的で、さう長く續くものでない。時が到れば、自ら變るものだから、何も心配することはない云々。

これも一理あるが、併しながら、之れはさうかと云つて、たゞ、悪い傾向として、放棄され

得べきであらうか。我々は決して決して、等閑に附すべき問題でないと思ふ。それ故、これに就いては、如何にすれば、さういふ惡傾向が、今の中に喰ひ止めて、矯正することを得るか。その方法を講じなければならぬと信ずる。

で、さういふことにするには、先づもつて、事の實況を、明かにしなければならぬから、ありの儘に、多くの事實を擧げて、これを分解もし、綜合もして、恰度裁判官が、審理を進める時のやうに、逐一批判の利刀を加へて、往かなければならぬ。それが最も肝要なのである。これから變態性慾を研究する順序として、先づその意義を解説し、更に古來の研究家を列擧して、變態性慾史の一斑を示さうと思ふ。

## 第二章 變態性慾の範圍、研究家及びその分類

### 第一節 その狹義と廣義とに依る範圍

及び謂ゆる色情狂

さて變態性慾は、廣汎に涉つて、性慾界の過半を占めてゐるものであるけれども、その世人

に知られてゐるものは、重症なるもののみで、輕症のものには、目の着かざるものが多い。例へば男でありながら、女の姿を爲し、舉動も女の如くにして、女に見られんと欲するもの、或ひはその反對に、女でありながら、男の姿をして、男に見られんと欲するもの如きで、未だその程度に到らないものは、人に知らるることも、怪しまるることもない。又、性慾に富んで、その行爲の甚だ猛烈なるものの如きもの、或ひは異性に暴行、暴虐を加へて、興味を感じるもの、或ひはその反對に暴虐せられて、これを悦ぶもの、或ひは又、異性の便所又は湯屋を窺視して、狂喜するもの、異性の乳房又は手足を狂崇するもの、或ひは異性の毛髪、被服物等に垂涎するものなどは、誰れの目にも着くが故に、世人は主に、さういふ種類のものばかりを認めてゐる。

さういふわけで、世人の知るところの範圍は、狭小なのである。併し變態性慾はかういふものばかりではない。勿論これらは、變態性慾のうちでも、著しいものであるが、輕症のものには、常人と殆んど變りのないものもある。例へば異性の眞似をして見たいと思ふ情は、何人にもあるし、又、他人の閨門には、何人も感興を咬るが如きで、さういふ例を擧ぐると際限がない。彼の恐るべきサド性のもので、輕い者は常態性慾と殆んど變りがない。

で、さういふ微弱なものは、別として、普通に認められる變態性慾でも、各々症名と症候とがあるに依り、これは後文分類の條に、述ぶるとして、茲に先づ、世人が動もすれば、稱するところの、色情狂について一言しやうと思ふ。

### 第二節 謂ゆる色情狂

色情狂は、一に花風病又は淫亂症ともいひ、俗にいふ色氣違ひのことで、外語にてはエロトマニア Erotomania と謂つてゐる。併し言語學上からいふと、エロトマニアは、男女に依つて異なり、男の場合はサチリアシス Satyriasis 女の場合はニムフォマニア Nymphomania といつて、區別してゐることを、記憶しなければならぬ。

併し意義は同じで、男も女も、色慾に狂ひを生じたものを、總稱するのである。前述の如く色慾の亢進したるものや、異性さへ見れば襲ひかゝるもの、或ひは異性を虐待して、性慾を満足するもの、或ひはその反對に虐待を受けて、狂悦するもの、或ひは腰巻やズロースなどを、狂崇するといふやうな、變態性慾者は、無論色情狂に違ひないのであるけれども、精神病學の上から言ふと、色情狂は精神病の一症候であつて、一つの病名ではないのである。

これを解かり易く言へば、精神に異常を來たして、發狂すると、その色情までも狂ひて、常態でなくなる。故に色情狂は、精神病患者の現はす症状で、本來的に、色情狂と稱する病名はないのである。故に色情狂は、多くの精神病患者に見るもので、症状には輕重の差はあるが、これを一律にすることは出来ないものである。

此の色情狂に就いて、世人の誤解してゐる點は、神經衰弱や、ヒステリーなどの如く、病名と思惟することである。故に如上の病的症状を、變態性慾と稱することはよいけれども、特に色情狂といふのは當たらないのである。

一體性慾といふものは、人間に於いては、大脳中の性慾中樞（性領ともいふ）を、本部として、そこから發現するものであるが、併しそればかりでなく、これを助くるものがある。即ち腦及び體中の一定部に有する内分泌腺で、その作用に依り、旨く調和され、それが微妙なる感情となつて、發露するのである。

然るに大脳は、一部に働くものでなく、大脳全體として作用するが故に、大脳に故障を生じて、精神に狂ひを來たすと、性慾にも異常を呈して、狂態を演ずるやうになることは、前に述べた如くである。これ必然の結果で、精神病に免れざる症状である。

斯様な症状を見て、世人は單に、色情のみ狂つたもののやうに思ふ。それが間違ひなのである。勿論、精神病の種類に依つて、その症候が種々である如く、色情異常も、一樣でなく、或るものは猛烈を極め、或るものは軽くして、目立たないものもあるが、概して言へば、精神病と色情異常とは、相伴ふものなるが故に、何れにか異常があつて、十人は十人まで、謂ゆる色情狂的狀態を呈するのである。

併し又、中には、色情許り狂つたやうに、見えるものもある。前に示した色情亢進者、性的暴虐者などには、常人の如く見え、而も機にふれて、突如異性に危害を加へるものもある。甚だしきは、好んで屍體を姦するために、故意に人を殺すといふやうな、兇惡無殘な行爲を、敢てするものもある。

### 第三節 性慾異常を呈する精神病の種類 及びその解説

色情異常を呈するものは、右の外にも多くある。今、精神病學的に之れを類別して見ると、躁鬱狂、偏執狂、妄覺狂、癲癇、ヒステリー、中毒狂、早發性痴狂、麻痺性痴狂、老老性痴狂、

白痴、痴愚及び魯鈍等で、いづれもみな、性慾に異常を來たすものである。以下に少しく解説を試みるとしやう。

躁鬱狂は、感情に障害を呈するもので、その症候に、躁揚状態と抑鬱状態との二様がある。前者は感情が爽快になつて、何の理由もなく、たゞ嬉しくなるのである。後者は之れに反して、すべての陽性情調が消失して、荒涼慘憺たる光景となるのである。さういふ理由で、躁揚性のものは、色情も亢進して、姦淫凌辱を敢てし、特に婦人などにその鬱勃たる性慾を、遂げざる場合には、非常に猥褻なる行爲を、自ら擬することなどもある。

偏執狂は、妄想を發する精神病で、妄想病とも謂ふ。その主なる症候として、現はるる妄想は、初めは不定であるが、長い月日を重ねる間に、妄想が漸次確定して、遂には動かすべからざるものとなる。

感情は、妄想の種類に依つて、一樣でないけれども、その性慾に關するものは、嫉妬に關するもの（嫉妬妄想）、性的被害に關するもの（婦人では暴行されたと妄想するもの）の類で、極めて頑固なものである。これに關する例に、次ぎの如きものがある。

獨逸で、或る家の女中が、その主人に暴行されたといつて、法廷に訴へ出た。それは容易ならざることと、主人を呼び出して、訊問したが、夢にも知らないことであつた。それから専門醫の鑑定となつて、よく調べると、彼の女の妄想であつたことがわかり、精神病院に送られた。妄覺狂は、幻覺を生ずる病氣で、意識は明瞭であるのに、突然と幻聽、又は幻視が現はれるのである。これ又甚だ頑固なもので、眞實と思ふのである。その性慾に關するものは倒錯症、猥褻行爲又は色情亢進等で、もとより妄覺的に生ずるものであるけれども、事實と信するゆゑそれを眞實のこととするのである。

癲癇は、よく人に知られてゐる精神病で、その發作には二様ある。一は四肢の痙攣をもつて始まり、次いで強直を來たすものであるが、他の一は痙攣なく、その代りに、一時的の失神、眩暈、顛倒等を來たすものである。

概して意識は濁濁して、朦朧状態となり、その間に種々な無意識的動作がある。性慾に異常を來たすことも勿論で、暴行、同性姦、若くは獸姦などを、平氣で行ふものもある。

右の癲癇、又は神經衰弱に似たものは、ヒステリーで、最もよく人に知られた精神病である。男にもあるが、いづれかといへば女に多く、謂ゆるヒステリー性格を、呈するものである。こ

れは甚だ感受性に富んで、落ちつかず、動作軽率、想像力強大にして、虚言を吐くことの多いものである。

性慾異常を伴ふことは無論で、色情亢進、或ひは猥褻に陥ること多く、又、感情としては嫉妬、怨恨、猜忌、憤怒等が激發し易く、甚だしきは殺人、放火等恐るべき行爲を、敢てすることも少なくない。

次に中毒狂の中で、主なるものは、アルコール、モルヒネ、コカイン、カンタリジン及び磷等で、何れも色情に異常を來たし、往々亢進して、異性に暴行を加へ、或ひは姦通、猥褻等を演ずることがある。特に恐るべきものは、カンタリジン中毒で、これにかゝると、一層猛烈となつて、遂には生命を失ふやうになる。

早發性痴狂は最も、早期に發する精神病で、早きは十五、六歳、遅きも二十五歳を過ぐることは少なく、のちには一種固有の痴狂状態となつて、痴呆となる特徴を有するものである。

なほ本症には、破瓜病、緊張病及び妄想性痴呆の三種あつて、その症状も一樣でないが、色慾に異常を呈することは同じで、荒淫となり、猥褻、姦淫等を犯すことが多い。

麻痺性痴狂は、前者と同様に、痴呆となる精神病であるが、その原因は異なり、腦の微毒か

ら起る。その發現時期も、初老の頃から（四十歳乃至五十歳）、普通は二、三年、早ければ數ヶ月、甚だしきは數日間で、鬼籍に上るといふやうに、甚だ恐るべきものである。

此の疾患は、濃厚な遺傳性を有するもので、その子孫に、健全なものは少い。クレペリン

Dr. Krapelin 氏の調査に依れば、同患者の子供百二十四人中、健全なものは、六十六人で、その他の五十八人は、みな不健全であつた。

注意すべきことは、右の遺傳素質は、その親に、十年前より潜伏してゐることである。故にその麻痺狂となる十年以前に、生れた子供の症状は、比較的軽く、その以後に生れた子供は、一般に重い事實に照らして、證明することを得る。

なほ、本病の症状は、多種多様であるが、色情は一般に異常を呈して、多くは亢進するために、姦淫、猥褻等を常とし、而もその行爲は無意識で、恰も酩酊者の如き状態を呈するのがその特徴である。

老聾性痴狂は、老人に發する精神病で、感情が烈しく、而も頑固となり、道徳心は鈍麻して、背徳行爲が多くなる。色慾も異常を呈して、亢進するときは、猥褻、姦淫等を爲して、憚らないものもある。

それから白痴は、先天に脳の發達しないもので、親の梅毒に原因するものが多い。その智力は、極めて劣等であるけれど、感情は頗る激烈で、自尊自負の情強く、憤怒し易くして、復讐的破壊を好む。時に強度の白痴には、さういふ危険性の存しないこともあるけれども、その他は概ね亢進して、これを遂ぐるために、異性に危害を加へることがある。

痴愚は、先天に精神の不完全なものであることは、白痴に似てゐるけれども、それよりは稍程度の、軽いものである。性慾の異常も勿論で、暴行、姦淫、猥褻等を行ふことが少くない。終りの愚鈍は、愚痴よりも軽いもので、俗に低能といふのはこれに當たる。感情及び意思も完全でないために、日常の行爲は放縱で、怒り易く、嫉妬心強く、復讐心に富み、色慾にも倒錯性のものが多い。

以上は、性慾異常を伴ふ精神病の主なるもので、何れもみな危険性に富んでゐる。精神病には、發作的時期を有するものもあるが、また環境の刺戟に依つて、突然に發作することもある。この關係の深いものは、氣候及び季節で、春季は一年中、最も起り易い時である。次ぎは夏季で、暑さのために、誘促されることが少くない。何れにしても、精神病の素質ある家庭では、十分注意を要するし、社會でも警戒する必要がある。

#### 第四節 變態性慾の歴史及びその研究家

##### 第一項 古代の學者

變態性慾の歴史として、茲にその全般を窺ふことは困難である。何となれば、第一には、これに關する文獻が乏しくあるし、第二には、常態性慾と混同して、多くは一緒に研究せられて來た關係上、變態性慾のみを、専門に研究した人は、少かつたからである。

併し變態性慾の研究としては、これがむしろ順當で、常態性慾を研究したのちに、進んで入るべきものである。故に變態性慾の歴史といへば、一般の性慾史となるが、それでは範圍が、非常に廣くなつて、研究に愈々困難を來たすは、免れざるところである。それで予は、少し無理とは思つたけれども、變態性慾を主として、これに關する研究家を、各方面から探がし出して、敘述せんと欲するのである。

斯うして見ると、變態性慾の研究家は頗る多く、専門家でなくとも、常態性慾と關聯し、又はこれと對象して、研究した結果、その名を知られた學者も少くない。換言すれば精神病の専門

家でなくとも、花柳病、泌尿生殖器病、婦人科病等から進出して、變態性慾を研究せるもの、又は心理、教育、犯罪、文藝等の方面から、頭角を現はせるものの類で、さういふ學者は多くある。

特に重きをなせるものは、變態心理學者及び法醫學者で、變態性慾と密接の關係があるところから、見逃がさなかつた。斯くして變態性慾の研究は、益々盛んになつたのである。

如上の事實は、近代の趨勢であるが、併し遡つて古代を見ると、その起源も、沿革も怪しくなつて、暗中物を探ぐるが如き觀がある。たゞ僅に文獻の傳ふところに依れば、變態性慾の始まりとも見るべきものは、同性愛のやうであることが知らるる。歴史で有名なユダヤの大王ダビツトは、ジョナサンを愛して、彼れが死を悲んだが、これは同性愛のためであつたと傳へられてゐる。希臘時代になつてからは、七聖の一人ソクラテスと、アルシピアテスとの、戀物語りがあり、プラトリーの同性愛も、知られてゐる。

プラトリーは元來、女を嫌つて、これを近づけなかつたが、その代りに美少年を愛して、これと親しんだ。併しプラトリーの愛は、精神的であつたので、精神的の戀愛を、プラトニツク・ラヴと稱するに至つた。けれども肉體を措いて、精神的の戀愛なるものが、果してあるであらう

かといふことを、性の研究家及び醫家の全部が、みな一樣に唱道して、プラトニツク・ラヴを偽善と看做してゐる。

これは兎も角として、プラトリーは、この點から考察すると、その一面に、變態性慾の潜んでゐたことは、窺はれるであらう。

又、希臘の女詩人サッフオーも、同性愛に耽溺した一人で、サフォニズムといふ語を、残した程である。これに關する戀物語りもあるが、それは別卷に述ぶることにする。

以上は、同性愛を讚美した人々であるが、さういふ感情からでなく、醫學上から、色慾の病的現象を、認めた學者には、希臘最初の醫聖ヒツボクラテスがある。例へば色慾の烈しくして狂的に亢進するもの、又は鈍麻して、無慾なるもの、畸形兒の生まるること等を説いた如きで同性愛なども、知られてあつた。併しその理由に就いては、牽強附會の説多く、採るに足らなかつたのは、醫學も心理學も、未だ開けてゐなかつたからである。

哲學者のアリストートルも七聖の一人で、特に彼れはあらゆる學術に通曉せる碩學であつた。その著書の中に、變態性慾に關する事項も、掲げられてあるところを見ると、その説の當否は兎も角として、變態性慾研究の第一歩と看ても、誣言でないと思ふ。アリストートルが、女を

生理的に發育の不完全なものとして、甚だしく卑賤せる餘り、これを半人間としたことは、有名な話として、今日も話題となつてゐる。彼れの哲學から見れば、女は半人間の如く見へたかも知れぬ。

アリストートルの説を祖述したプリニユーといふ希臘の博物學者も、女を卑賤することアリストートルに劣らなかつた。特にプリニユーは、月經を有毒なものとして、女の身體及び精神までも、汚れたものとした。その説に依ると、女は月經のために、身體は不潔となり精神は病的となつて變態性慾に陥り易いといふことである。

## 第二項 性教育より觀たる自慰

歐洲にても、未開時代として、學術は進まず、加ふるに宗教と戦争とのために、妨げられて、科學の發達は、極めて遅々たるものであつた。併し疾病に關することは、重大なものとして、注意せられ、特に精神及び色慾の異常は、教育上忽にすべからざるものなるが故に、この方面の問題は、醫師及び教育家に依つて、割り合ひに討究せられたのである。

それは既に數世紀以前のことであるが、併し當時の研究は、斷片的にして、一つも纏まつた

ものはなかつた。ところが十九世紀の初期にドイツの Tisort 氏が出でて、自慰の危害に關することを發表した。これは性教育のためにした研究であるけれども、自慰は自然に反する性行爲なる以上、變態性慾として茲に掲ぐることは、許さざるべからざるところと思ふ。

この外に、サラガネツク Sarganeck 氏も、自慰に關する著書を出した。これはドイツ氏よりも、以前に發表したものであるけれども、さ程社會の注意を引くに至らなかつた。

自慰は變態性慾の一現象であると同時に、生理上危害があり、又後害を貽すものである故、多くの醫家及び教育家等の、研究するところとなつた。その人々はケルン Klein のマイロースキー Dr. Meirousky 氏、ミンヘン München のマルキユース Marcuse 氏、米國の尿學者ヤング Prof. Young 氏、獨逸のヘルマン・ローレデル Hermann Rohleder 氏等で、みな有名であるが、取り分けローレデル氏は、一千九百十九年に、「自慰論」Die Masturbation、と題する一書を著はした。

此の書の目的は、家庭及び學校に於いて、妄行せらるる自慰者の撲滅を希望するにあつたのであるが、氏は激しく當時の教育家に攻撃せられた。併し一方に於いては、氏の主張に賛同せる人もあつて、最も有名なる教育家ギーセン Giesen 氏及びシルラー Prof. Dr. Schiller 氏等の



如きは、その序文を書いて、世に推薦した程である。  
右は、性教育の立場にある人達で、直接變態性慾には觸れてゐないけれども、その研究は、變態性慾の領分に、入つてゐることを忘れてはならぬ。

### 第三項 性の科學家

斯様に變態性慾の一部分は、教育及び衛生と、交渉を有し、期せずして研究せられたのは面白い。なほ専門家でなくとも、常態性慾と關聯し、又はその對象として、變態性慾を研究した知名の醫家、性學家等少くない。例へば獨逸のイワン・プロホ Dr. Iwan Bloch. 瑞西のアウグスト・フォール Dr. August Forel 氏、獨逸のアルベルト・モル Dr. Albert Moll 氏、英國のハヴェロック・エリス Dr. Havelock Ellis 氏、伊太利のマンテガツア Dr. B. Mantegazza 氏及び同ベチネ Prof. A. Bedine 氏等で、何れも一流の大家である。

此れ等諸氏の著書には、纏まつた變態性慾書はないけれども、部分的に論じたもののあることは、彼れ等の著書を開すれば明瞭である。その主なるものを掲ぐると、次ぎの如くである。

プロッホ氏の著「現代の性生活」 Das Sexualleben unserer Zeit in Seinen Beziehungen zur

Morderren Kultur. は、ベルリン Berlin の發行で、第九版は一千九百九年である。

英譯もある。The Sexual Life of Our time. として、八百五十頁より成り、廣く讀まれてある。此の書の中にある變態性慾は、病的現象としての賣笑、花柳病を初め、變態性慾の人類學的考察、同性愛、サチスムス、マゾヒスムス、フェテシスムス等が擧げられてゐる。全般ではないけれども、發見多く、その變態性慾に與へた貢獻は少くない。

プロッホ氏は一千八百七十二年の生れで、死去は一千九百二十二年だから、享年五十歳を過ぎなかつた。併しその間に如何なることを爲したかといふに、ベルリン醫科大學を出でてから花柳病の専門醫として、活躍した外に、性の研究家として、ヒルシュフェルド、キンド、エリス、ウルツフェン氏等當代の諸大家と共に、性學の一科を、建設した。又、専門の花柳病に就いては、その歴史を探究し、延いて賣笑問題に及び、これに關する大部の書を完成した。

プロッホ氏の此の「近代の性生活」は、性に關するあらゆる問題を解決して、近代人の迷へる性生活に、一道の光明を與へた。その中にて、如上の變態性慾を拉し來つて、快く論斷したのである。大戦後氏は、英京ロンドンの「性學研究會」の名譽會員に推薦されたが、長壽を保たれなかつたので、惜しまれた。

フォーレル氏は、精神病学の大家にして、瑞西チューリツヒ Zurich 大学の教授であつたがその後、同地の癲狂院々長となつた。これより先き氏は、性の研究に没頭し、その點に於いても、一流の大家として、歐洲に名を知られた。恐らくは精神病から、出發したものであるが、なほ頗る多方面で、教育、文藝にもたづさはつてゐる。

又、フォーレル氏は、社會問題にも指を染め、かつて優生學 Eugenics の上から、人種の改良に就いて、その根本の性慾及び生殖にあることを認めて、「性問題」 Die Sexuell Frage. と題する大著（六百四十頁）を、一千九百七年にミュンヘン München から發行した。その人種改良の意見としては、

低能者、痴愚者、犯罪者、酒客及び變質者等は、大部分知らず識らずの間に、その子女を禍して、人種をその質に於いて、墮落せしめつゝある。

と、叫んだ。この「性問題」は、性を研究する者の、必須の名著として、世界各国に譯され、英譯にては、The sexual Question. (London) と題し、ドクトル・マーシャル氏が、譯して、その序文に

フォーレル氏が、困難にして、容易に手を下し能はざる問題を、巧妙に且つ科學的に、取

り扱つたことを、認めなければならぬ。

と言つて、原著を賞讃した。日本にては大正四年七月に、大日本文明協會にて、一千九百二十二年版の原著を譯して「性慾研究」と名づけて發行した。

フォーレル氏は、クラフト・エビング氏（後文詳し）の説を、祖述したと云はれてゐるが、併し一己の識見をもつて、性問題を優生問題及び社會問題として、考察したる功は、決して没することを得ない。

なほ、フォーレル氏の變態性慾は、該書中に一部分を爲してゐるが、相當の量を占めてゐる。その内容は、次節に記載の學說分類に照らし看るがよい。

次にモル氏の性學講本 Handbuch der Sexualwissens chafen. も有名である。ライプツヒ Leiniz の發行で、第二版は一千九百二十一年であるが、一千四十六頁の大卷である。モル氏はプロッホ氏の後を繼いだ大家で、性の研究に貢献した功勞は、極めて大きくある。その「セキジュアルウイツセンシヤフテン」なる新語の如きも、プロホ氏の建設せる性學にヒントを得、更に諸大家と協讃して、作つた名である。

此の「性學講本」は普通のモノグラフと異なり、諸大家の筆に成れるものを、モル氏が自分

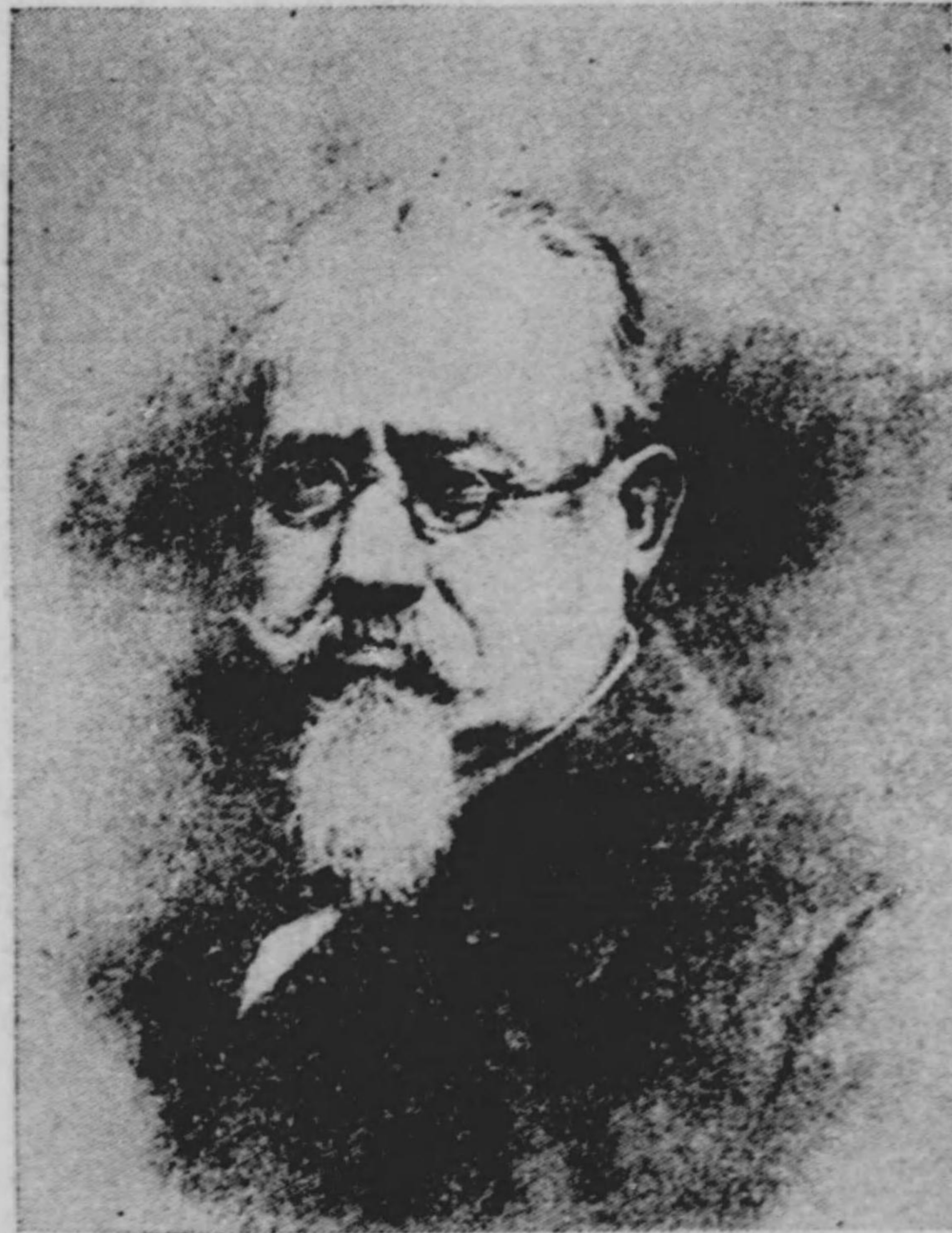
の研究したものと一緒にして、編述したものである。十二編一千四百十六頁の大版で、四百十八の寫眞版を入れ、執筆者はワイセンブルグ、エリス、プシヤン、チイレル、リピング諸氏である。此の中モル氏の變態性慾にかゝるものは、第七編「性生生活の障礙」で、エリス氏との共述になつてゐる。

モル氏は、此の書の外に、性教育に關する書を著し、それにて同性愛、サヂスミス、マゾヒスムス、露出症、食尿症等を説き、なほ歴史上及び文藝上よりも、述べてある。

それから伊太利には、スプランサニー Sparsany 氏を初め、マンテガツア Dr. B. Mantegaza. ロムプロゾー C. Lombroso. 諸氏がある。スプランサニー氏は生物學上より、マンテガツア氏は心理學上より、又ロムプロゾー氏は、精神病學の上より、各方面に涉つて、性の分野を研究し、名を知られてゐる。

スプランサニー氏は、僧侶であるが、生物學の造詣深く、種々實驗した中で、性の衝動に關する説は、性的方面の學者にも多く信じられてあつた。マンテガツア氏は、戀愛を美しく説いて、その著書はよく讀まれたものであるが、彼れは又一方に於いて、倒錯性慾を研究し、直腸性感説を唱へた。

圖 六 第



像肖 - ソ ロ プ ロ ム ロ

この説は、普通生殖器に存する快美神經が、直腸に分布するが故に、脱糞の際に、快感を覚えるのである。かゝる種のもものは、受動的鶏姦を好むといふことである。氏の名著「戀愛生理學」Psychologie der Liebe. は、一千八百八十六年の刊行である。

のであつて、頭骨の調査は、實に夥しき數に上つてゐる。斯くして刑事人類學を設け、犯罪學の基礎を建てたのは、見落すべからざる功績である。

然るにこの變質徵候を有するものは、必ず犯罪者と決まつてゐないところから、ロムプロゾ  
 1氏の犯罪定型説には、異論多く、今日は餘り信するものはなくなつたけれども、併し一部理  
 由のあることは、許さざるべからざるところである。この變質徵候は、變態性慾とも、共通す  
 ることを、忘れてはならぬ。

さういふ譯で、伊太利の學派には、特殊の色彩があつたが、大戦後俄然擡頭して、更に新ら  
 しき研究が始まつた。ベチネ Prof. A. Bazine. 氏の著「十一のヴィナス」Le Dotici Veneti. は  
 その代表で、全部六卷より成り一千九百二十二年にミラノ Milano から刊行された。この書は  
 従來の性研究と、趣きを異にし、悉くヴィナスに名を藉つてゐるところが面白い。

内容を十二部に別ち、その中變態性慾に關するものは、第五部の頽廢せるヴィナスで、同性  
 愛及び自慰等が説かれ、第六部の不具のヴィナスにも、生殖不能及び半陰陽等を述べ、第七部  
 の狂へるヴィナスにて色情狂、第八の殘忍なるヴィナスにて、サチスムス及びマゾヒスムス  
 が記されてある。餘り眞面目ではないけれども、趣味に富めることは言ふまでもない。

性の研究が、獨、埃、佛、米等を離れて、英國に行くと、急に寂しくなつて、眞面目に之れ  
 を研究する者の見えないのは、怪しまれてならぬ。これは謂ゆる紳士國と自ら誇る英國が、何

事もお上品を尙び、學問でもお上品のものでなければ、手を附けないといふ古典的な國風から、  
 性慾だの、戀愛だのといへば、そんな汚れたこと、穢ないことを、何で我が國に入れられやう  
 と、頭から排斥するからであることは、言ふまでもない。

かういふ國柄は、英國ばかりでなく、外にもあるといふことであるが、適當に導けば、良結  
 果を得る筈の性慾を、單に汚穢として、壓迫するために、却つて社會の裏面に、闇黒を來たし  
 て、淫風の盛んになることを、知らざる英國官憲の無智を歎いて、性の研究を遂げたのは、ヴ  
 ハロツク・エリス氏である。

エリス氏は史學、社會學、人類學、心理學等に精通せる哲學者で、宗教、文學に對しても造  
 詣深く、特に性の研究については、當代英國に於ける、一人者であると同時に、世界に於いて  
 も、屈指の大學者で、噴々たる名聲を博してゐる。併し名の揚るものは、その實があるためで、  
 エリス氏の名著「性の心理」は、實に氏をして、その名を輝かした基である。

この「性の心理」Studies in the psychology of Sex. は、全部六卷より成れる浩濶の名著で、  
 あらゆる性問題を解説し、而も極めて穩健、着實に妙筆を振つてあるが、それでも英國の官憲  
 に悦ばれなかつたので、止むを得ずわざ／＼米國に送つて、ヒラデルフヒヤから、發行したと

いふれ附きのものである。

では、危険なものかといふに、仲々何うして、危険どころか、人の必ず知らなければならぬ性に就いて、従来不明、疑問のまま置かれてあつたことまでも、叮嚀懇切に説き明かし、人をして毫も、嫌厭の情なからしむる點に於いて見るも、その必要が認めらるであらう。エリス氏の變態性慾は、「性の心理」の第二卷に、「セキジュアル・インヴァーシヨン」(Sexual Inversion)として、述べられてあるが、大量のものである。此の外モル氏と共著の、「性生活の障碍」のあることは、前に掲げた如くである。

#### 第四項 變態性慾の専門家

變態性慾は性の研究家を始め、精神病學者、法醫學者、犯罪學者等には、多く或ひは少く必ず研究されてあつたことは、前に述べた如くであるが、又、これを専門として、その研究に没頭したものもある。依つて、變態性慾の専門家として、茲に一項を設けた所以である。此の點に就いて、先づ第一に挙げなければならない學者は、リチャード・フォン・クラフト・エビング Richard von Krafft-Ebing 氏である。氏は一千八百四十年八月に、獨逸のマンハイム

圖 七 第



像肖ゲンピエトフラク

(獨逸聯邦のバーデン)に生まれ、プロツホ氏より先きなること、三十二年である。氏は初め、ハイデルベルヒ、チューリツヒ、ウキン等の各大學に於いて、醫學を修めたが、悟るところあつて、一千八百六十四年に、イレノウ精神病院の助手となり、のちバーデン・バーデンに、神經病醫として開業した。

戦後はバーデン・バーデンの電氣療法研究所長を振り出しに、精神病學及び神經病學の教授として、各地の醫科大學に聘せられ、同時に精神病院長を兼任しつゝ、研究を怠らなかつた。又、私立の精神病院を経営したこともあつた。それから一千八百八十九年に、精神病學及び神經病學の教授として、ウキンに赴任したが、一千九百二年に、その職を辭して、グラーツに移り、同年十二月

その地に終焉した。時に年六十二歳であつた。

クラフト・エビング氏は、精神病を研鑽の傍ら、性慾の異常に就いて、深く注意するところあり、多年その経験するところの材料を蒐集し、これを統一評論して、一書となし、「病的性慾心理」 Psychopathia sexualis-mit besonderer Berücksichtigung der conträren Sexualempfindung と題名して、一千九百年に發行した。これは變態性慾の研究に關したる、最初の著述で、またこれ位完成したものはないと言はれてゐる。

さればクラフト・エビング氏の、「病的性慾心理」は、變態性慾の完璧ともいふべく、一たびこの書が出てから、諸學者の好資料となつて、その學説が多くの著書に、引用された。フォーレル氏は勿論のこと、モル、エリス諸氏も、同様であるところを見ても、此の書が如何に、變態性慾研究家の羅針盤となつたかと、推察せらるるであらう。

これに依つて見ても、變態性慾は、クラフト・エビング氏に依つて、始めて完成したといふも誣言でないと思ふ。この書の内容は、次節の學説分類の條に掲げてあるから、参照してもらいたい。

なほ氏の精神病、神経病、犯罪等に關する著書多く、何れも世に稱讃せられてゐる。

クラフト・エビング氏と、殆んど同時代に奮闘して、變態性慾の研究に貢獻した學者は、佛蘭西學派のフェーレル氏である。氏も精神病學の大家で、數多の患者を取り扱ふところから、性慾異常に關する材料が、夥しく集まつた。氏はこれをまとめて、編述したものを、「性本能と進化及び崩潰」 Instinct, Sexual evolution et dissolution. と題して、一千九百十一年に、パリから發行した。

此の書は、主として倒錯症とその原因、性交障礙に關する事實を、精神病學上より考察したもので、多數重要な材料を收めてある。

フェーレル氏の説に依ると、倒錯は遺傳質に襲來するもので、健康の人には、發することはない。實際に多くの倒錯症患者を調べて見るに、先天に素質があるか、然らざれば家庭に缺陷のあることが、發見せらるるのである。それでかういふ病的性慾者の徑路を明かにして、これが豫防法を講ずることは必要で、當さに、醫學者の努むべき義務であると、極言した。

### 第五項 病的性慾及び生殖の研究

それから獨逸には、病的性慾と生殖との研究に就いて、二名星がある。ヒルシフェルド

Enus Hirschfeld. 氏と、ローレデル Hermann Lohleder 氏とで、先づローレデル氏から述ぶると斯うである。

ローレデル氏は、生殖器に關する生理及び病理を研究し、特に「自慰論」を著して、性教育の根柢を築いたことは、前(四十三頁)に述べた如くであるが、此の外に氏は「人類生殖學全書」 Monographie über die Zeugung beim Menschen. と稱する六卷ものを出し、大に名聲を揚げた。その中病的に關するものは、第一卷中の人類に於ける病的生殖、第三卷の男子に於ける性的機能障害、第四卷の女子に於ける生殖機能の性的障害、第五卷中の半陰陽等で、全卷殆んど病的性慾及び生殖に満たされてゐる。

次にヒルシフェルド氏も、病的性慾を研究して、クラフト・エビング氏に次ぐ大家と仰がれてゐる。その著「性的病理學」 Sexualpathologie は、一千九百十七年から、翌年の十八年にかけて發行したものであるが、三卷の大冊で、悉くみな病的性慾に關するものである。此の種の研究者には、缺くべからざる名著である。その内容を示すと、

- 第一卷 自慰より起る發育不全
- 第二卷 性型の變換として男性的女子と、女性的男子及び中間型

第三卷 インポテンツに關する代謝機能

であるが、その中にて、同性愛、性交不能等の諸問題を、解説してゐる。

右の「性的病理學」に對抗して、なほ一層精密な研究を遂げたものは、ステツケル W. Stekel 氏で、「衝動及び戀愛生活の障害」 Störungen des Triel und Affektlebens. と題する大著を出した。一千九百二十一年の刊行で全部五卷、その内容は、

- 第一卷 神經性恐怖症
- 第二卷 自慰と同性愛
- 第三卷 女子に於ける性愛生活の病的心理——不感症
- 第四卷 男子に於ける性的機能障害——インポテンツ
- 第五卷 成人に於ける精神的、小兒性、存続性

であつて、精神分析學の上から、討究してある。精神分析學とは、如何なる科學であるか。次項に一言しやう。

第六項 精神分析學、同性愛及び半陰陽の研究

これより先き、埃國のフロイド Dr. Freud 氏が精神を研究して、人の心の中に存する意識中には、幼年時代に、親、又は親に代つて、自己を養育して呉れたその人から、無意識に感受した性質が潜んでゐて、それが戀愛の基礎となることを、種々の實驗に依つて、發見した。

これが精神分析學の要旨で、詳しいことは第一編第一章にあるが、氏は高弟のブリウエル Dr. Breuer 氏（ニューヨークのブロンクス病院神経科々長、及びコロンビア醫科大學精神分析學教授）と共に、ヒステリーの研究に關する一書、Studien über Hysterie. を、一千九百九年にウキンから出した。これぞ精神分析學の基礎となつたもので、それから精神分析學が、盛んに研究せらるるやうになつた。

次に獨逸のリウエンフェルド L. Löwenfeld 氏は、神經病の上から、性的障害を研究して、「性生活と神經病」 Sexualleben und Nerveneiden. を出した。第五版は一千九百十四年の刊行で、自慰及び性的機能障害等を研究するに、缺くべからざる名著である。

女子の性慾缺乏症は、重大な問題である故、廣く研究され、前のヒルシフェルド氏を始め、ステツケル氏等の、手懸けたものであるが、精神分析學の權威アドレル O. Adler 氏も、これに關する名著を出した。「女子の性慾缺乏症」 Die narngelahrte Geschlechtsempfindung des Weibes.

はこれで、第三版は一千九百二十年の刊行になつてゐる。性的麻痺、性交嫌厭及び不能等が包括され、有益な書である。

面白いことは、男女の半陰陽に關する研究で、これには前に掲げたるクラフト・エビング氏を首めとし、プロホ、フォーレル、モル、エリス、ベチネ等諸氏の研究多くあるが、ヒルシフェルド氏も、「男女に於ける同性愛」 Die Homosexualität des Mannes und des Weibes. と題する老大な書を、一千九百二十年にベルリンから出した。同氏は元來、同性愛の研究が専門で、材料の豊富なること、その比を見ず。變態性慾を研究するものの、賞讃措かざる快著であることは、言ふまでもない。

神祕にして、微妙なる同性愛の原因には種々あるが、自慰と關係のあることは、前記ステツケル氏の書の、第二卷に示されてあるところにも知らるる。又、一方は半陰陽とも關係があるので、この方面の研究に、手をのばすものも少くない。その中にて最も大なる研究をなしたものは、ニューゼボール Neugebauer 氏で、その著「人類に於ける半陰陽」 Hermaphroditismus beim Menschen. は、一千九百八年に、ライプツヒで、發行されてある。紙數は七百五十頁からの大著で、全部半陰陽の研究を満たされ、隨つて材料豊富、興味津々として盡きざるものが



ある。  
惜いかな著者は、大戦に出征して、戦死を遂げた。けれども、この名著は、永久に残るであらう。

矢張、半陰陽に關係のある研究が、英國に行はれた。それはベル W. Blair Bell 氏で、「性的複合」Sex-Complex. は、一千九百二十年ロンドンで發行された。女子に就いて、健康體と病體とに於ける特徴と、その機能とに對する内分泌作用の關係を、研究したもので、複合せる女子の實物も、少しは示されてある。

### 第七項 貞操、賣淫、犯罪及び風俗の研究

それから貞操の破壊及び賣淫の研究に就いても、見落すべからざるものがある。婦人科醫として、又評論家として、有名なキツシ Heinrich Kisch 氏は、此の方面に就いて、職務上得たる數多の材料と、經驗とに基づき、破貞及び賣淫に關する二卷の書を公にした。名づけて、「婦人の性的不信」Dei sexuell Untreue der Frau. といひ、一千九百十八年に發行した。第一卷にては姦通、第二卷にては賣淫を論じてある。

キツシ氏は博學多識で、才筆に加ふるに、資料豊富なるが故に、興味の深い名著として推されてある。

又、單に、賣淫に關するモノグラフを出したものは、前のプロツホ氏で、その名著「賣淫」Die prostitution. は、一千九百十二年にベルリンで發行した。九百頁の大冊で、主に古代からの賣淫史を、説いてゐる。此の外賣淫を論じたものには、サンガー Margaret Singer. 女史の、可なり大きな賣淫論があるし、又、前に述べたる諸家の著書中にも、一部或ひは數部、大抵挿まれている。如何に賣淫が社會問題として、重要視せられたか、随つて變態性慾と關係の深いものであるかも、知らるるであらう。

變態性慾はまた、犯罪特に性的犯罪と、密接なる關係がある。故に犯罪學者及び法醫學者等は必ず、變態性慾を研究するし、變態性慾の研究家も、犯罪の領分に進出して、互に研鑽するやうになつたのは、緒論にも言つてある如く(一四頁)自然の趨勢と謂ふべきであらう。

そこで性的犯罪の研究家を擧げて見るに、我々はエーリツヒ・ウルツフエン Erich Wulfen 氏を、第一人者に推さねばならぬ。その名著「性的犯罪者」Der Sexualverbrecher. は、ベルリンの發行で第七版は一千九百二十年に出された。「近世犯罪學全書」中の一巻で、裁判官、法醫

學者は勿論、變態性慾學者等の、見逃すべからざるものである。  
一轉して、エロチシズムの方面から、あらゆる獵奇に渉る性現象の研究をなして、變態性慾にも、大なる貢獻を呈したものがあつた。それは有名なフックス Eduard Fuchs 氏で、その著「繪入風俗史」Illustrirte Sitengeschicht. は、六卷の大冊で、一千九百十年に、ミュンヘンから發行したが、二年を経て、更に「春の藝術史」Geschichte der erotischen Kunst. を、一千九百十二年に、同地から出版した。何れもみな、非常に獵奇なもので、一般には發賣を禁じられてゐる。

以上にて、變態性慾の歴史と、研究に於ける趨勢の一斑とは終つた。なほこの外にもウエストフアール Weiphal. カスベル Casper. ペロフイ Péloué. シヴリエル Chevalier. マニヤン Magnan. ウルリツクス Ulrichs キールナン Kiernan 等諸氏の、没すべからざる研究があるけれども、一々枚舉にいとまないから、ここには略して、本論中の各條下に、掲ぐることにする。

第五節 變態性慾研究者の學説分類

上來の解説に依つて、變態性慾の範圍が明瞭となり、隨つてこれを研究する諸學者の意見も、定まつたが、その範圍が餘り廣過ぎるのと、研究に不便なところとから、各學者は適宜に之れを分類して、研究の領分を定めたのである。

此の分類法には、種々ありて諸學者一様でないが、精神病學及び法醫學の上から、考察して、變態性慾を分類したのは、クラフト・エビング氏の學説で、その完備してゐる點に於いて、現今これに及ぶもの無いことは、前に一言した如くである。併し餘り精神病學的で、専門家以外には、興味少き嫌ひがある。兎も角、その學説分類を、掲げて見るとしやう。

第一部 神經性及び精神性なる變態性慾の總論  
第一 末梢神經病

- 甲 感覺性
- 乙 分泌性
- 丙 運動性
- 第二 脊髓性神經病
- 甲 勃起神經の疾患

- 一 刺戟
- 二 麻痺
- 三 制止
- 四 刺戟性衰弱
- 乙 射精中樞の疾患
  - 一 射精の異常に容易く行はるる疾患(早漏症)
  - 二 射精の異常に困難する疾患
- 第三 腦性なる神經病
  - 甲 色慾遠期症——解剖的及び生理的機轉の時期以外の色慾
    - 一 小兒期に現はるる色慾
    - 二 老年期に再び喚起する色慾
  - 乙 色慾の鈍麻若くは缺如
    - 一 先天性異常としての色慾缺如
    - 二 後天性色慾鈍麻

- 丙 色慾の亢進症
- 丁 色慾の倒錯症
- 第四 倒錯的衝動に於ける對異性性慾
  - 甲 淫虐症——淫行と他動的虐待及び暴行と聯結せる症
    - 一 淫樂的虐殺、殘虐、殺人淫樂、食人症としての好淫
    - 二 屍姦
    - 三 女子に對する刺傷又は鞭撻
    - 四 女子汚穢
    - 五 表象的淫虐症
    - 六 架空的淫虐症
    - 七 任意の對象物に對する淫虐症
    - 八 動物に對する淫虐症
    - 九 女子の淫虐症
  - 乙 マゾヒスムス——虐待又は暴行を受けて、色慾を満足する症

- 一 他人の暴行迫害に因る色情満足
- イ 受動的鞭撻及びマゾヒスムス
- ロ 表象的マゾヒスムス
- ハ 空想的マゾヒスムス
- 二 假裝せるマゾヒスムス——足及び靴フエテシスムス
- 三 コプロラグニー——自己服従を兼ね、又は明かにマゾヒスムスの嗜好の満足を目的として、企てられたる行爲
- 四 女子のマゾヒスムス
- 五 マゾヒスムスとサヂスムスとの合併症
- 丙 性的狂崇拜——女子の身體の一部、又は衣服の斷片の觀念と色慾との聯結せる症
  - 一 女子の身體の一部に對する性的狂崇拜
  - 二 女子の衣服に對する性的狂崇拜
  - 三 一定の物質に對する性的狂崇拜
  - 四 動物に對する性的狂崇拜

- 第五 同性間性慾——代償的色慾及び性慾衝動に因る對異性感覺の消失
- 甲 顛倒的性慾感覺
    - 乙 男女兩性に於ける後天的現象としての同性間性慾
      - 一 色情の單純なる顛倒
      - 二 男性脫化及び女性脫化
      - 三 偏執性色情的變態への移行
      - 四 偏執性色情的變態
    - 丙 先天的現象としての同性間性慾
    - 丁 男子に於ける先天的同性間性慾
      - 一 精神的半陰陽
      - 二 同性色情者
      - 三 女性的男子
      - 四 女性化
    - 戊 女子に於ける先天的同性間性慾

己 同性間性慾の診断、豫後及び治療

第二部 變態性慾の各論

第一 精神的障礙の種々なる定型その状態に於ける病的性慾生活の現象と精神的發育停止

第二 後天的精神薄弱状態

甲 精神病後の精神薄弱

乙 卒中後の精神薄弱

丙 頭部外傷後の精神薄弱

丁 後天的精神薄弱

戊 麻痺性癡狂

第三 癲癇

第四 週期性精神病

第五 躁病

第六 淫亂症

第七 憂鬱症

第八 ヒステリー

第九 偏執病

第三部 變態性慾と法律

第一 陰部露出症に於ける猥褻罪

第二 強姦及び淫樂的兇殺

第三 サチスムスに原因せる身體の損傷、物體毀損及び動物虐待

第四 マゾヒスムス及び色情的隷屬

第五 性的狂崇拜に基づく身體損傷、強盜及び竊盜

甲 強迫觀念を基礎とする性的犯罪者の責任能力

乙 異性性慾者

一 陰力を有する者

二 陰萎なる者

丙 同性色情者

第六 十四歳以下の者との猥褻行為

- 甲 非精神病者の場合
- 乙 精神病的なる場合
- 第七 反自然的猥褻行爲

- 甲 獸姦
- 乙 同性者との猥褻行爲——鶏姦

一 非病的なる馴致せられたる鶏姦

二 女子の同性愛

第八 屍好症

第九 近親姦淫

第十 被監督者に對する敗徳行爲

以上は、精神病学を基礎として、建設したもので、殆んど變態性慾の全貌を、竭くしてゐる。故に専門家には必要であるけれども、一通り精神病学を、修めた上でないと、諒解し難く、随つて趣味の乏しき嫌ひのあることは、前に述べた如くである。

次ぎはフォーレル氏の分類で、クラフト・エビンググ氏を、祖述したものであることは、既に言明したところであるが、併しまた、發見もあるに依り、参考に掲ぐることにした。

第一部 生殖器の病理學概論

第二部 花柳病

第一 痲疾

第二 徵毒

第三 軟性下疳

第三部 性慾性精神病理學

第一 反射的障害

第二 精神的陰萎

第三 性慾的遲期症

第四 性慾的感覺鈍麻——性慾感情及び衝動の先天的缺乏

第五 性慾的過敏——性慾衝動の異常亢進

第六 自慰

第七 性慾衝動の倒錯——性慾的感覺の異常

甲 異性に對する邪惡なる性的感情

一 殘虐なる淫樂

二 マゾヒスムス

三 フェテシスムス

四 屍 姦

五 陰部露出症

乙 同性に對する性的感情

一 男性間性愛

二 女性間性愛

丙 小兒好愛——兒童に對する性的感情

丁 獸姦——動物に對する性的感情

第八 性慾異常——精神病者及び精神的異常

甲 色情亢進症——男子淫亂症及び女子淫亂症

乙 沈鬱狀態及び痴呆

丙 偏執病

丁 病的嫉妬

戊 感覺異常

己 危險性を伴へる性的異常

庚 心氣症

辛 ヒステリー

壬 精神的異常なる病的性愛

癸 精神異狀者の戀愛

第九 性慾衝動に對する藥劑の影響——麻痺劑及びアルコール

甲 男子の性慾に對するアルコールの變質作用

乙 女子の性慾に於けるアルコールの作用

第十 暗示に因る性慾異常及び倒錯

甲 感動の病原的作用

乙 精神分析

丙 病的被影響性——ヒステリー性なるもの

第十一 習慣に依る性的倒錯

エリス氏の分類法もあるけれども、氏は性的倒錯を主として、同性愛を述ぶること詳しく、全般に涉つては、省略した観がある。

第一 性的倒錯症

第二 男性々の倒錯症

第三 女性々の倒錯症

第三章 變態性慾一般の研究法

第一節 原則違反と模擬

愈々變態性慾の研究法となつた。先づ變態性慾の真相から、始めやうと思ふ。それは前にも

述べた如く、自然的なる常態性慾に反したものであつて、遺傳性と潜伏性とに富んでゐる。(一頁参照)變態性慾に流行する傾向のあるのは、これがため、變態性慾者の心は、變り易く、移り易くある。

併し移り氣のものや、心の變り易いものばかりが、變態性慾者ではなく、その特徴は、常態性慾を嫌がるにあつて、さういふ人は、必ず他に好むところのものがある筈である。我々の知らんと欲するところのものは、その性質と形式とで、何れにせよその源に遡れば、環境又は祖先に歸して、一朝一夕に知ることを得ないけれども、科學的に觀察するときは、遂にその真相を探り得るに至るであらう。

變態性慾はもと、常態性慾より變化し、又は轉向したものなるが故に、その關係は密接で、恰も紙の表裏の如くなつてゐることが知らる。即ち表から見れば、右に向つてゐる文字が、裏から見ると、左に向つてゐるが如きで、根本の原則から、變換したものである。故に原則の全然變化したものは勿論、模擬又は類似したなどのものにありても、この中に入れなければならぬ。

これを例すれば、日本の家屋は、日本式に依つて、造るのが正式であるが、これに西洋風を





第八圖 紫式部の「源氏物語」を模倣したる柳亭種彦の「修紫田舎源氏」の口繪

加味して、謂ゆる和洋折衷の家屋とするときは、取りも直さず、變態家屋となるが如きその一つである。

又、書籍にても、人の原作を焼き直したり、或ひは骨組みを、易へたりして作るものなど、世間に少くないことは、人の知る如くで、學界では剽窃と云つてゐるが、これなども、變態と謂へばいはるるのである。例へば紫式部の傑作「源氏物語」が九百三十餘年を過ぎた今日も、古典文學の粹として、燦然光輝を放つてゐるが、それに倣つて、柳亭種彦が「修紫 田舎源氏物語」といふ草紙を作り、讀者の好奇心を唆つて、大當たりをした如きものである。

第八圖は、桐壺の帝に比したる東山義正と、桐壺の更衣に比したる、義正の愛妾花桐とであるが、此の二人が變態といふわけではなく、田舎源氏そのものが、變態的の作物であるといふことである。

### 第二節 變種と謂ゆる變人

併し此れ等は、人為的變態で、自然の變態ではない。眞の變態は、自然なるもので、それは動植物をはじめとして、人間にも甚だ多くある。

先づ動植物から見ると、生物學にて謂ふところの變種 Variety は、種 Species の變化したもので、矢張變態である。而してその變化は、形態の上に現はれてゐるが、人間にあつては主として心理的に、變つてゐる。即ち變態心理で、さういふものを、俗に變人又は變り者といつてゐる。

この變人に見る變態心理は、常態心理に外れたもので、これに屬する範圍は、極めて廣いが、その中にて、性慾と結びついたものは、これを抽出して、特に變態性慾といふのである。便宜上これを算式にて示すと、次ぎの如くなる。

變人(又は變り者) + 性慾 = 變態性慾

故に、變態性慾を解かり易くいふと、變態心理の性慾と結びついたもので、それが現象の常態性慾と、異なりたるものを謂ふのである。

それで變態性慾を、又、他の語にて、不自然といふことは、緒論中に説いた如くであるが、なほ倒錯性慾若くは顛倒性慾等、種々の異名にて、呼ぶこともある。何れにしても病的で、神經若くは精神に、障礙を蒙り、その結果として、性慾に異常を來たしたものである。

圖 十 第



(りよ五之卷「子張狗」)(郎三彌は左。藏藤は右)藏藤河洲

異性に對しても、性的感情に障害を來たして、異常に變ずるときは、その色慾が亢進したり、或ひは顛倒したりして、奇怪なる行爲の下に、満足を求むるものもある。例へば異性を虐待して、快感を咬り、或ひは性的隷屬となつて性感を満足し、或ひは屍を好愛する類のもので、

つて、それを愛し、随つてこれと、性的關係を結ぶものである。斯るものを同性愛又は同性間性慾 homosexualist. と謂ふことも既に述べたが

圖 九 第



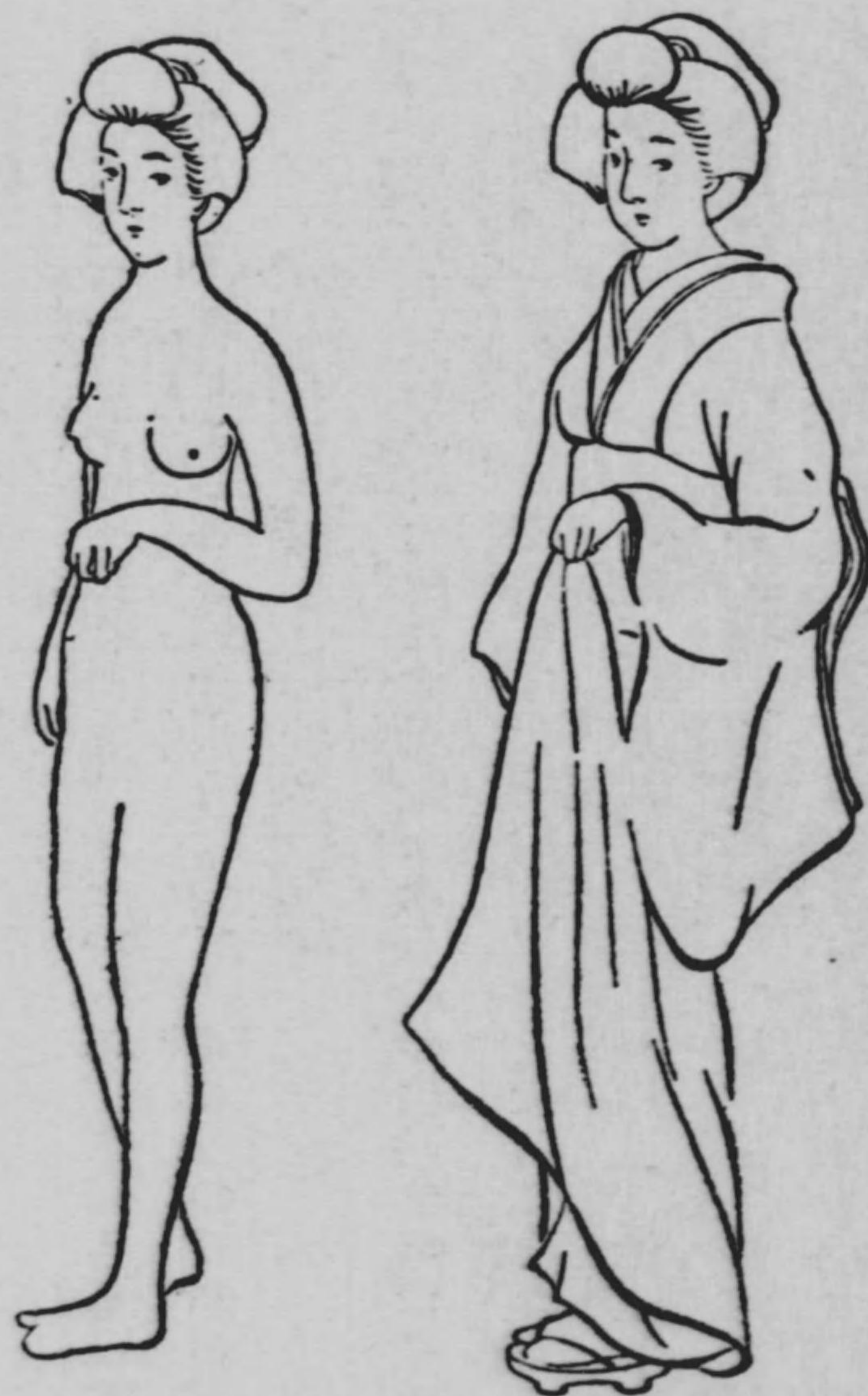
將大輕足同と郎三彌出小、從扈の家倉朝前越 花郎男

だが、たゞ斯う云つただけでは、判明るまいから、具體的に言ふとしやう。普通の人は、一般に異性を好愛するもので互に戀ひしたり、戀されたりするものであるが、變態性慾の或る種のものになると、その異性に對する戀ひが、同性に代

が、同性に代

第三節 變態性慾の内容

圖 二 十 第



部體るなと點焦のスムスシイテエフ  
(りよし美體肉の人婦本日)

にては、手、足、乳房、臀部若くは毛髪が、その焦點となる。故にフェティシスムスは、手のフェティシスムス、足のフェティシスムス、乳房のフェティシスムス、毛髪のフェティ

シスムス等と別かれるのである。何故に、身體の一部に、斯様な感興を有するかといふに、これはその一部が、平素隠蔽せら

で、それから起こる事件には、殺人や、暴虐が多く、甚だ恐るべきものである。次ぎは、異性の體部や、衣服その他何でも、身に附けたもの、又は附くべきものに對して、性的に感興を有するものである。これはフェティシスムス Fetichismus と稱するもので、體部

圖 一 十 第



女少るれらげ虐に者患スムスチサ

多くは危険を伴ふものである。これが變態的感興と稱するもので、常人にも興味のあるものである。此の變態的感興には、如何なるものがあるかといふに、その種類に依つて、一様でないが、彼の異性を虐待したり、残忍な行爲を加へたり、斯くして、相手の苦悶するさまに、感興を覺ゆるサチスムスや、その反對に、相手から虐待を受けて、これを快く感受するマゾヒスムスなどは、變態性慾の中にも、最も著しいものである。サチスムスは、非常に危険なもの

れて、滅多に見ることを得ざる場合に、瞥見又は窺視することが、非常に大なる感興を惹くからである。言ひ換へれば、神祕に對する獵奇で、その方が、衣服に包まれたる全體を見るよりも、強く刺戟するのである。

然らば身に附けた衣服や、庶物は何うかといふに、これも獵奇に違ひないが、その外に、これを附けた人を、聯想することが、主となつて、起るのである。例へば女の襦袢、又は湯もじが、男の目を魅惑するが如きである。

斯様に、獵奇と、聯想とを起す動機となるものは、フェティシスムスとなる。毛髪は體の一部であるが、人形や、彫刻なども、その代はりとなることがある。そこでフェティシスムスの強いものになると、犯罪の原因となることが多いゆゑ、注意しなければならぬ。

それは如何なる犯罪かといふに、體部に對しては、毛髪を切り取つたり、臀部を刺したりする類で、まさに傷害罪となるし、被服等に對しては、湯もじや襦袢、手巾などの窃盜となり、人形や彫刻又は寫眞のやうなものも、無斷に失敬することがある。何れにしても、彼れらを烈しく亢奮せしむるものが、患者の魅惑となるのである。

併し此の種の犯罪は、同じ犯罪でも、目的が違ふので、その犯罪は殆んど一定してゐる。法

醫學を待つまでもなく、何人にもその特殊犯罪なることが知られて、興味のあるものである。それから、生きてゐる人間でなく、死んだ人即ち屍に就いて、性的に亢奮するものがある。これは好屍性 Nekrophilien と稱するもので、それが性慾と結合するときは、屍姦 Leichenschändung となり、更にサヂスムスと結びつくときは、兇殺性屍姦 Necrosadismus (人を殺して、その屍を姦するもの) といふ、恐ろしいものになる。

この外には、異性でも、同性でもなく、動物に就いて、性的に興味を覺ゆるものもある。獸姦といふのはこれで、中々少くない。外國には甚だ多く、カトリックの或る寺院では、麗々とこれが禁條を掲示しなければならぬほどの、情勢に、置かれてあつたことが、文献に残つてゐる。

以上の説明は、ほんのあらましである。詳しいことは、追々とわかつて来る。

#### 第四節 變態性慾の症狀

前節の如く、變態性慾は、自然的なる常態性慾の、變つたものであるが、その變り方には、重輕の差等がある。醫學的に、前者を重症とすれば、後者は輕症で、患者と看することは、當然

である。併しその差等は、もとより程度の問題であらねばならぬ。故に重症も軽症も、各々その間に、幾等の階級があるし、且つ重症と軽症との間にも、往々中間的のものがあつて、どちらにも、附け難いものもある。

それである故、變態性慾を、その症候の上から観ると、大體、次ぎの如く別かつことを得る。

- 一 重症 症候の顯著にして、行爲の上に現はるるもの。
- 二 軽症 さほど著しからざるもの。
- 三 中間性 兩者の中間に位するもの。

此の三つのものを區別するには、精神病學に基づいて、それ等の變態心理を、十分に觀察しなければならぬ。例へばサヂスムスの軽いものは、相手を打つ程度に止まるが、重症になるとそんな生やさしいことでは、承知しない。刃物で刺したり、突いたり、又は緊縛して、置いて折檻したり、遂にはこれを惨殺して、快哉を叫ぶといふやうな、鬼畜に等しいものもある。謂ゆるラスト・モード Lustnord で、サヂスムスの最も重いものである。

マゾヒスムスでも、軽いものは、捻られて、悦ぶ位のものであるが、重症になると、針で刺

されたり、小刀で斬られたりしなければ、満足しない。その結果として、死亡したものもある。

同性愛などでも、軽いものは、精神的に止まつて、友愛程度のものであるが、重症になると、肉的關係を結んで、夫婦の如くなる。同性愛から起る情死、又は嫉妬に絡らんで、相手を殺害するものなども、重症なものであること言ふまでもない。

此れ等の症候は、原因に依つて、もとより一樣でないが、先天性のものは、概ね重く、後天性には軽いものが多い。又、さういふ症候に、停止的のものと、漸進的又は急進的なるものとの、差もある。

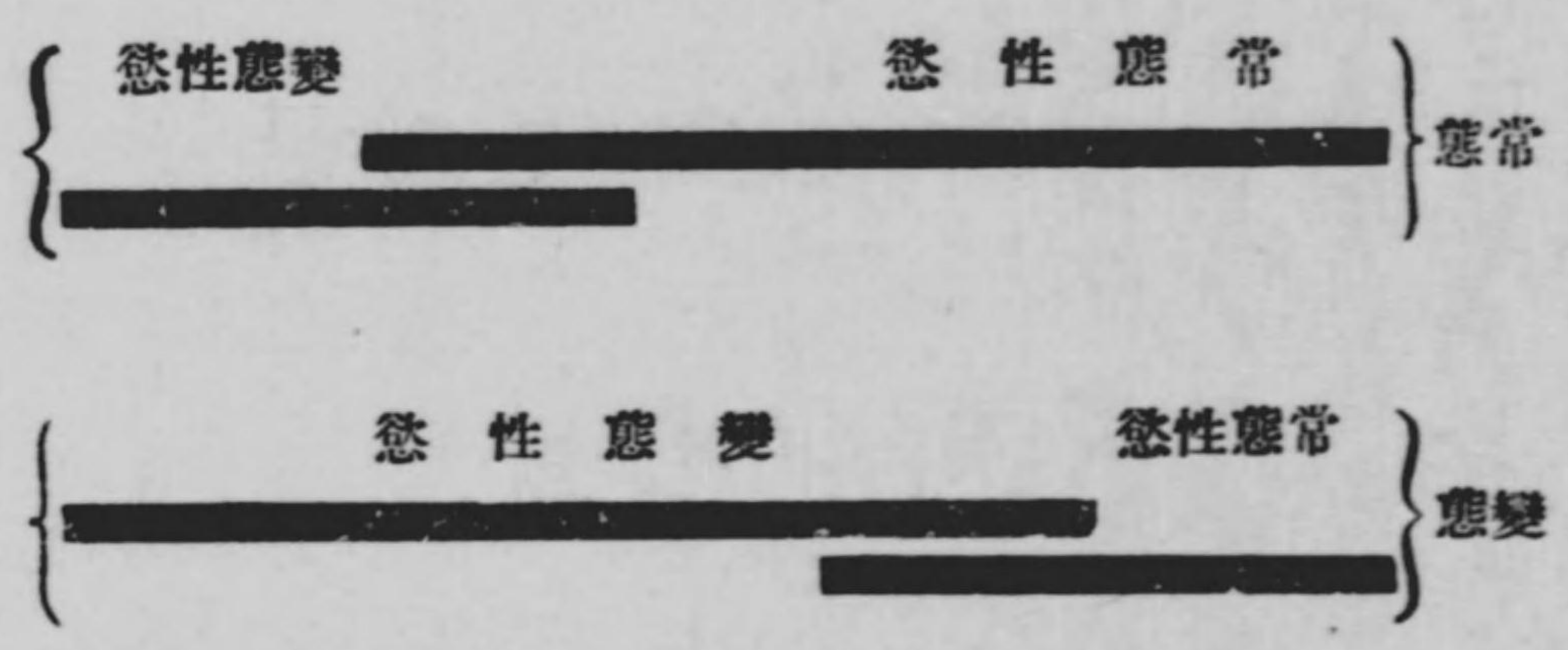
停止的といふのは、症候がその程度で、止まつたもので、より以上、進行することは少いが、漸進的又は急進的のものになると、文字通り、徐々に、又は急劇に、進行するのである。何ういふ點でもつて、それらの症候が停止したか、進行したかを、知ることは、ちよつと難かしいが、彼らの感情、及びそが行爲の上に現はるる状態を、よく觀察して、比較するときは、大體に於いて、判明するものである。換言すれば、精神的であつたものが、肉的に及んだならば、進行しつゝあるものと見て、その防遏法を講じなければならぬ。前述の如く、性慾の異常から、起る犯罪は、これを特殊犯罪として、その裁判は、専門家

の鑑定を、經た後に、しなければならぬ。これが法醫學 裁判醫學ともいふ)の主とするところ、現今一般に行はれてゐるのは、變態性慾と犯罪とが、密接に關係して、變態性慾の發現が、直接或いは間接に、犯罪となるからである。

斯様に變態性慾は、犯罪と關係があり、さなくとも獵奇のもので、人の感興を引くところから、變態性慾といへば、誰れの心にも、面白いと衝動を興へて、動もすれば、社會の風俗を紊したり、或ひは安寧を害したりする、恐れがあるので、予輩は、その弊害を除くために、變態性慾に關する正確な知識を獲得し、同時に、その原因及び動機を研究して、その恐るべき犯罪の豫防を、講ずることを、努めたいと思ふのである。

併し精密にこれを研究すると、人の心の裡には、先天に、多少の變態性慾を含んでゐて、それが常態性慾と、混淆してゐる結果、何れから何れまでは變態性慾、何れから何れまでは、常態性慾と、判然區別し難いことが多いので、これを鑑別することが、實際に於いて困難である。之れを圖解すれば、第十一圖の如く、變態性慾にも、常態性慾が、少しく混じて居るし、常態性慾にも、變態性慾が混じてゐるが、常態性慾に混する變態性慾は、比較的が多い。これを見ても、常人に、變態性慾の含まれること多き理由が、察せらるるであらう。

第十圖



それで、變態性慾に於ける最初の研究として、如何なるものを、變態性慾といふかといふ時には、重症で、何人にも判明する倒錯症を、除いた外のものに

は、一般に

- 一 生理に反するもの。
- 二 風俗に反するもの。
- 三 習慣に反するもの。
- 四 道徳に反するもの。
- 五 法律に反するもの。

の五項で、すべて傳統的の規定に反し、或ひは破壊する性慾を名づけてよいのである。

此の定義は、上來說述せる事實に照らして、一層明白であらう。更に進んで、右の五項目は、以下に敘述するつもりであるが、その前に予は、變態性慾の研究が、何故必要であるかを

説き、併せてその方法を、開陳せんと欲するのである。

第五節 變態性慾研究の必要—何故必要

變態性慾患者は、神経衰弱又はヒステリー等の如く、頗る多くある。更に病原の潜伏してゐるもの、又は素質を有するものに至つては、一層多く、それらが何かの動機にふれると、突發すること、精神病患者と異ならぬ。

實際に於いて、精神病と變態性慾とは、密接なる關係があつて、精神病患者が即ち變態性慾者で、變態性慾者が、精神病者であると云へることは、既に述べた如くである。(三二頁参照) 斯やうに多數存在してゐる變態性慾者を、そのまゝ不問に附することは、精神病者を放任し置くのと同じで、社會的に疑懼せらるるは、言ふまでもない。たゞ變態性慾者の中にも、さして危険でないものもあるから、一概に律することは出来ない。たゞ變態性慾は常態性慾と異なり、個人的にも、社會的にも、多少危険性を帯びてゐる以上、大に注意しなければならぬこと、再言するに及ばぬ。

世人は精神病者を恐れて、あばれる者は監禁したり、病院に入れたりして、外へ出さないやうにしてゐる。ヒステリーや神経衰弱に就いても、それ／＼治療を講じてゐる。又花柳病に對

しても、同様に治療することを、怠らないが、精神病患者と、親戚筋の變態性慾者に就いては、何の顧慮するところなく、放任してゐるのは、何ういふわけであらう？ これ變態性慾に關する、正確なる知識がないためでなからうか。

花柳病は淫蕩の結果で、不潔の遊びから起る醜病であるだけ、昔は社會に嫌はれ、患者もこれを恥ぢて、密に醫者にかゝるといふ有様であつたのが、近來は餘りに多いこの花柳病に慣れてか、醜病とも、恥病とも思はないやうになつた。

然るに變態性慾といふと、妙に神経を刺戟して、全く淫猥厭ふべきものの如くに思ひ、これを口にすることすら、恥ぢる有様である。されば専門家以外には、之れを研究せんと欲するものなく、ありとすれば、たゞ書籍に就いて、その興味を味はんとするもののみであることは、歎すべきである。

精神病と犯罪と、密接の關係がある如く、變態性慾と犯罪との關係も、甚だ深く大なること、前に言つた如くで、たゞ精神病者の犯罪には、意識渾濁或ひは朦朧として、謂ゆる無意識なるのに、變態性慾的の犯罪は、多く明瞭なる意識の下に、行はるる差はあるけれども、その原因には孰れも變りがない。



斯様に、變態性慾から、犯罪者が多く出て、社會に害毒を流すこと、すくなからざるを思ひ合はするときは、何うしてこれが研究を、等閑にされやうぞ。此の事實から見ても、變態性慾の研究は、刑事家、法律家を始め、教育家、宗教家、歴史家、文藝家、その他一般の人士に、必要であること、決して忘るべからざるところである。

### 第六節 變態性慾の研究法

#### 第一項 一般の研究法

變態性慾の研究といつても、單に獵奇の材料を集めて、これを綜合するのみでない。材料の蒐集は、無論必要であるが、すべて變態性慾として現はるる状態には、原因を措いて單に現象のみを捕へることは、恰も樹になれる果實を見て、それが何うして生じたかを、知らないのと同じで、學術としては價値がないのである。

醫師が病人に對するものも、これと同じで、たゞ現在の症狀のみを見るに止まり、遡つてその原因の、何にあるかを採らないときは、その病を治すことが、恐らく出来ないであらう。

わかり切つた病氣でも、原因の一樣でない以上、その因つて來たれる病原を、明かにした上、對症療法を講ずることは、醫師の職務で、而もそれが極めて重大な責任なのである。

變態性慾の研究も、これと同じく、現象としての事實そのものを、たゞ直観するのみならず、必ずその根本に遡つて、その原因を究めなければならぬ。故に變態性慾を、眞摯に研究するには、精神病學は勿論、生物學、人類學、心理學、教育學、社會學、犯罪學、民族學、土俗學から、歴史、宗教、文藝等に至るまで、すべて性に關する學術の力を籍りて、助けとしなければならぬ。

性慾の研究に就いては、獨逸にドクトル・ヒルシフェルド氏(前出)の設けたる、性科學研究所のあることを聞いてゐる。規模は頗る大きく、常態性慾は勿論、變態でも、病的でも、すべて性に關することは、細大漏さず網羅し、實驗的に研究を遂げて、功績を擧げてゐる。その部門は、生理學、病理學、衛生學、生物學、人類學、心理學、法醫學、土俗學等で、實驗室までも備へてあつた。ところがナチスになつてから、國粹主義者のため、一切を焼き棄てられてしまつたといふことは、昨年五月八日の新聞に出てゐる。

又、埃國のクラウス氏も、會を組織して、性の研究に従事し、發行書を會員に頒布してあつ

た。これも世界的のもので、日本の土俗やら、性生活に關する材料も、大分蒐集してあつた。この點に就いては、日本の性に關する藝術的材料は、世界から羨望されてゐたらしい。併し日本では、此の種の研究所も、研究會も出来る見込みはない。かつて小倉清三郎氏が、會員組織の下に、研究會を起したこともあるが、忽ち當局の忌諱に觸れて、解散を命ぜられ、會員（博士、學士その他の有志者）は、罰金に處せられたといふことである。さういふわけで、日本では個人的に、研究する外道はないと思ふ。予がこゝに披瀝せんと欲する方法も、個人的であることを、承知してもらいたい。

## 第二項 初學者の心得

右の如き状態であるから、性慾も、變態性慾も、性教育のやうに、授けることは出来ないに依つて、研究に志すものは、書籍に依つて、自ら學ばねばならぬ。予は此の書を買つて讀むものは、みな志のある人と看なして、それらの人々に、紙上にて研究法を授けやうと思ふ。先づ初學者は、適當なる學術書に基づき、常態性慾のアウト・ラインを學んで、一般セツクスの概念を得ることが必要である。この領分に屬する生殖器の構造、生理及び生殖の原理も、

當然理解しなければならぬし、自慰の危害、房事の調節等に關する知識も、得なければならぬ。何れにしても、慎重の態度を、失はないやうに心懸くることが肝要である。

それから變態性慾に、進んで行くのであるが、獵奇に満たされてゐる變態性慾界は、初學者で僅に常態性慾を學んだものには、さながら別世界に行つた觀がするであらう。常態性慾にあつては、本能として人生に根底を置き、濫用こそ悪しけれ、適用は何人にも必要で、必ず知らなければならぬものであるけれども、變態性慾は何れも有害危険で、それには調節の必要なく、絶対に防遏する外なきものなれば、その心して學ぶにあらざれば、ミイラ取りが、ミイラになる恐れがある。

次ぎは材料を蒐集すること、それは文獻からでも、又は新聞雜誌からでもよいが、確實のものに限り、集まつたならば、それを適當に分類して、整理することが必要である。徒らに興味を唆つて、耽溺してはならぬ。同時に物好きに集めることならば、止した方がよい。何となれば娛樂に集めるのは、學問として、價値がないからである。

すべての研究には、趣味が伴ふもので、趣味がなければ、研究は出来ないが、單に娛樂又は道楽として、集めるのは學問を爲さぬ。此の意を心得て、懸らないと失敗して、誤りを招ぐこ

とがある。よく／＼注意しなければならぬ。  
さういふ不謹慎なものでなく、眞摯の研究として、集めた材料は、何ういふやうに、観察すればよいかといふに、此の観察法に二様がある。一は科學的観察法で、一は統計的観察法である。左に解説しやう。

### 第三項 觀察法

科學的觀察法とは、科學に基いて、恰も生物學者が、生物を實驗觀察するやうに、その現はれた事實の原因を科學的に探る方法である。

これを例へて言ふと、ここに同性愛に溺れて、情死したといふ新聞記事が、あらはれたとすれば、それらは何うして同性愛に陥つたか、その原因や動機及び経緯等を、探らなければならなくなる。新聞の記事でも、大體は察せらるるものであるけれども、もし不明な場合は、その家人を訪問して尋ねるときは、眞相が知らるるに違ひない。

かういふ場合には、官憲や、新聞記者は便利であるけれども、事件に關係のない局外者には、調査の便がない。よしやあつたにしても、忙しい身にては、時間を潰して、態々訪問する

譯にもゆくまいから、諸新聞の上から綜合して、結論を求めるのが、捷徑と思ふ。新聞記事には、兎角誇大に流るる失があるけれども、事實を曲げることはないと思ふ。故に社會に現はるる事件を研究するには、新聞に依る外なきこと、重ねて言ふ必要はない。試みに一、二の例を舉げて見やう。

昭和七年五月九日、大磯の坂田山心中に於て、情死を遂げた若い男女の中、女の屍體を假埋葬された墓から發掘して、これを窃み出したものがあり、獵奇の犯罪事件として、世間を騒がしたが、犯人は十日目に逮捕されて、一切を白状したことは、諸新聞に報道された。

此の新聞記事は、言ふまでもなく、記者が掛官から許された範圍に於いて、記したものであるから、世人は坐ながらにして、事件の眞相を知ることを得るのである。その時の東京朝日新聞の記事中に次ぎのやうなことが記されてあつた。

(前略) 戀の亡骸が、假埋葬された宗善寺の墓地に着くと、彼れは晝間大評判だつたといふ美しいお嬢さんの顔を、一目見たいといふ氣になり、兩手で先づ柔かい土を、夢中で掘り出した。土の中からまるで白蠟のやうな、八重子さんの水々しい顔が、時しも灰色のおぼろ月に照らし出されたとき、彼れの獵奇心は、刃のやうに磨きすまされた。

死體を引きずり出すと、彼れは先づ（中略）六十五歳の老人とも考へられぬ力で、死體を小脇に抱へ、松林に圍まれた砂地を走り出して、（中略）彼れもさすがに、氣の毒だと思つたらしい。そのまゝ死體を砂地に埋めると、彼れは倉庫を出て、歸宅の途についたが（下略）犯人が何故に、麗人の屍骸を偷み出したか、その屍骸に對して、如何なることをしたかについても、想像の出来るやうに、記載されてあつた。犯人はたしかに變態性慾者で、稀れにある屍姦の一種なのである。

次ぎも隠亡で、死體から腦漿を取ること三十八個に及び、これ又獵奇犯罪として、世間を驚かした事件が、昭和八年四月十六日の新聞に報ぜられた。その記事に依ると、犯人は前科者で腦漿は賣り、死體は愛撫したといふ變態性慾者であつたといふ。

如何にも、獵奇の犯罪ではある。新聞を賑はしたのも當然で、予輩は諸新聞の報道に依つて、大體を諒解した。他にも種々の材料は多くあるが、それをたゞ社會の惡風として、一笑に附するならば、何の得るところもないけれども、研究的に蒐集して置くならば、好個の材料となるであらう。

次ぎに統計學的觀察法とは、統計學的に調査する方法である。そも統計學は、人間社會の現

象を數理的に觀察して、その原因結果を、説明する學科である。英國の人類學者タイラー Prof. E. B. Tylor 氏は、「制度の發達を研究する方法」と、いへる論題に於いて、如何に複雑せる社會的現象の原因も、統計學に依るときは、明かに發見することを得ると云つたのは、名言と謂ふべきである。

されば變態性慾に關する諸事實も、統計學的觀察法に依つて、説明せらるべきもの多く、たとひ手に取つて、親しく觀察することは得ないとしても、多くの事實を綜合して、これを他の事實と比較し、その關係に依つて生ずる結論を考察するときは、直接に觀察した事實と、同一なる結果を得ること明である。

#### 第四項 研究家の職業

變態性慾の研究は、前項の二方法に依つて、遂げ得らるるけれども、また各個人の職業に依つて、その研究に便否の差あることを、記憶しなければならぬ。これも前に一言した如く、刑事家、裁判官を始め、新聞記者等には、便利が多く、醫師、法醫家も、同様に觀察の便がある。併し官憲は、職務上かゝることを、發表することは出来ないで、野に下つた時でないといふ。

その説を聞くことは出来ぬ。然し、野に下つたとしても、問題は問題ゆゑ、これを發表するとは、なからうと思ふ。

そこへ行くと醫師、特に法醫學者には、抽象的になれば、幾らでも發表することを得る自由がある、實際に於いて法醫學者や、精神病學者に、變態性慾の研究家が、彼れ等に好材料の豊富なものも、多くの患者に接して、觀察の便があるからである。辯護士にも、取り扱つた事件から研究して、變態性慾に通曉せるものもある。

教育家は何うかといふに、教育以外には、社會の事象にたづさはることはなからうから、不便なやうに思はるるが、併し教へ子の中には、變態性慾のものがあるので、材料が得らる。それで教育家の中には、此の方面の研究を心懸けて、發表した著書も少くない。ものは心懸け次第で、何うともなる。

最も自由で、而も多方面なものは、何と云つても新聞記者で、志さへあれば、有益なる研究が出来ると思ふ。地方の新聞記者であるが、變態性慾に興味を有して、これに關する材料を數多集めて、これを予の許に送つて來た人がある。當時予は雑誌を経営してゐた時であるから、それを雑誌に掲げてやつたが、その觀察が犀利であると同時に、その苦心の程も、思ひやられ

て感心した。

かやうなわけで、變態性慾の研究は、職業に依つて、便不便はあるけれども、志さへ確乎してゐれば、研究が遂げらるること疑ひない。たゞ重ねて言つておくが、變態性慾は獵奇に富んで、興を唆るものであるから、耽溺しないやうに、意志を高め、自信を持たなければならぬ。

### 第五項 小説、傳説及び神話等に現れたる變態性慾

變態性慾の研究として、最後に一言したいものがある。それは小説、傳説及び神話等に現れる居る事柄で、興味に富んでゐるけれども、みな架空の想像で、眞にあつたことでないから、學術としては、何の價値もない。併し小説でも、傳説でも、乃至は神話にしても、そこに何か話しの種となるやうなものが、少しでもあつて、それを土臺に、時代も人物も、適宜に作り上げたものとすれば、いさゝか参考とならなくもなれないと思ふ。左に二、三の例を擧げて見やう。馬琴の作にかゝる「八大傳」に、伏姫と八房の犬との物語りがある。これは人獸の靈的關係で、姫は犬の表徴なる八個の珠を生んだ。その次ぎは猫と人と、性的關係で、かういふことになつてゐる。

八犬士の一人犬村角太郎の父、赤岩一角は劍士で、庚申山の探險に出かけたときに、山の怪猫に喰ひ殺された。然るに神通力のある怪猫は、一角に化けてそのまゝ家に戻つて来たので、誰もこれが妖猫の化身と、心附くものはなかつた。間もなく一角の妻で、美人の噂さ高き窓井が、懐妊して男子を生んだが、慾情の殘虐に堪えずやありけん、窓井は急死したので、それから數多の妾を、取り換へ、引きかへしたが、落ちつくものなき中に、一人船蟲といふ淫婦が、一角の氣に入つて、後妻に据へられた。

此の物語りの方は、前者よりも遙に肉的で、子までなしたのであるが、併し人と獸との間生は、未だかつて無いし、稀れに生まれることがあつても、育たないことを、流石の馬琴は知らなかつたと見える。否、知つてゐるも、傳説を信する時代だから、そのつもりで作つたものかも知れぬ。彼の信太の森の葛の葉や、玉藻前の如き狐の話もその一つで、甚だしいのになると、植物と人との情話もある。

三十三間堂の物語りにあるお柳は、平太郎と夫婦になつて、みどりといふ子供を設けた。墨染めの櫻も、人と契りをこめて、美しい女の妾となつてゐる。又、蛇と人との交渉も、甚だ多く傳説にあらはれてゐるほどだから、馬琴の構想は、咎むべきでないと思ふ。

なほ八犬傳にある變態性慾に、實在と思はるる人物は、前の一角の後妻となつた船蟲で、淫亂と殘忍性との、權化とも見える毒婦である。馬琴が船蟲と名づけたのも、名實相適つたといふも、誣言でない。彼の女は妖猫とも知らず、連れ添ふて、淫樂を擅にしたが、夫の眼病を癒したさに、懐妊の嫁の雛衣(角太郎の妻)に、胎中の兒を、舅に供すべく迫つたなど、人心あるものの忍ぶべからざるところである。

雛衣は觀念して、自ら腹を割ると、意外にも腹中から靈玉が飛び出し、彈丸の如く一角の胸に當たつたので、彼れは氣絶した。それを見て船蟲は、さては角太郎の仕業と、懷劍を逆手に打つてかゝつたのを、かねて、戸柵の中に忍んで、様子を窺つてゐた犬飼現八が、その場に跳り出し、荒れ狂ふ船蟲を取つて押へ、怪猫を悉く退治した。

船蟲は縛られて、籠山逸東太に連れ行かれたが、途中旅宿にて逸東太を得意の色にて蕩かし、そこを脱して、何方ともなく逃げ失せたが、到るところで悪事を働らき、或る時は人の妻となり、妾となり、或ひは美人局、或ひは夜鷹と、種々に變はる、巧妙な装ひ、四十島田も若々しく、男と見れば引つけて、金を絞る振舞ひ、言ひやうなき妖婦であつたが、惡運竭きて、遂に悲惨な死を遂げた。

馬琴は、船蟲をサヂスムスと、ニムフオマニアとの代表として、描いたのは巧妙である。この外にも、馬琴の作に、變態性慾の材料となるものは少くない。

又、京傳の作「櫻姫全傳 曙草紙」に、丹波國桑田郡の城主、鷲尾義治の奥方野分のことが出てゐる。野分は、恐るべき嫉妬から、義治の愛妾玉琴を惨殺し、のち義治は敵に滅ぼされ、野分は城を落ちて行く途中、盜賊に脅されて、操を汚したのみならず、性來の淫亂は、賊と狎れ親しみ、賊の女房を追ひ出さしめて、悲惨な死を遂げせしめた上、その女房に直つて、不義の快樂に耽けるさまを、詳しく描いてあるが、野分はサド性の毒婦であつた。

昔も色慾異常や、病的性慾のものが、あつたであらう。今日と變りがなからうけれども、學術的に、解説する知識がないので、物語りにしたのは、却つて面白いと思ふ。小説や傳説から材料の多く求め得らると言つたのは、このことで、文藝ものも、役に立つことを忘れてはならぬ。

變態性慾の總論は終つた。これから本論に入つて、先づ變態性慾の發生を述べやうと思ふ。これ變態性慾の根本で、研究の順序になるからである。

X X X X X X X X

# 第一篇 變態性慾の原因と要素、現象

## 及び人間の獵奇性と残忍性

### 第一章 戀愛の發生と潜在意識

#### 第一章 精神分析學上の考察

##### 第一項 無意識の戀愛

變態性慾の發生は、これを幼少時に現はる性的感情の上に於いて、認むることが出来る。此の事實に依れば、性慾の發生は、極めて早期にあつて、胎兒の際から既に萌發し、それが嬰兒、幼年、少年と成長する間に、漸く濃厚となること、戀愛感情の發生するが如くである。變態性慾には、先天性と後天性との別があつて、後天性なるものは、生後の習慣や、生活状態等、概ね環境から誘成せらるるものであること、緒論に述べた如くであるが、先天性のものは、胎兒の際から芽さしてゐるのである。

それで、かういふ場合に於ける變態性慾は、その原因を、遺傳の上に求めなければならぬが、後天性の變態性慾にあつては、嬰兒若くは幼兒に於ける環境と、密接の關係があるに依り、主としてその時の養育者に、注意を拂はなければならぬ。何故となれば、戀愛といふものは、嬰兒から幼時にかけて、養育されたその人の容貌、又は性格に感化して、無意識の間に、戀情を蓄へてゐるからである。

世人は妙齡時代に、戀ひするものを、初戀といつてゐるが、これはその實、二度目の戀ひであつて、最初の戀ひは、嬰兒から幼兒にかけて、無意識に蓄へた戀ひであつて、妙齡時代にはその潜在的戀愛を、はつきりと意識するのである。故に妙齡時代になつてから、戀ひの對象とするその人は、潜在的の戀人、即ち嬰兒から幼兒にかけて養育されたその人の倣に、似たものであるといふことを、精神分析學者のフロイド氏（五八頁参照）一派が云つてゐる。

フロイド氏の説に依れば、人間の精神といふものは、種々の作用を爲すものであつて、その中には夢などの如く、實に不思議なものもあるが、併し精神を分析して見ると、精神の奥の底には、廣い意味に於ける戀愛が、種々の心と雜居的に混じてゐるのである。それから夢も起るし、戀愛感情も發するのである。

これは人の心に潛める、戀愛といふもの一般の解説で、これならば別に變態性慾に當たらなないが、フロイド氏の説を籍りて言ふと、嬰兒が、その養育の父母に對して、無意識に戀ひするのであるから、子供は親を戀ひすることになる。早く言へば不倫であるから、變態性慾といふのは至當である。

ところがその戀愛の對象となるものは、異性であつて、男の子なるときはその母を、女の子なるときは、その父を戀ふといふことになるのである。勿論これは、明かに意識した戀愛ではなく、夢幻的のものではあるが、それが潜在意識となつて、戀愛の基礎を造るのである。換言すれば人間最初の戀人は、男ならば自分の母、女ならば自分の父なのである。

これがフロイド氏の學說で、一般に戀愛の原理を研究するに、缺くべからざる問題なるに依り、解り易く具體的の説明を試むるとしやう。

## 第二項 嬰兒又は幼兒の養育者に對する戀愛

或る家にお産があつて、男の子が生れたとすれば、その子が母の懷に抱かれて、お乳を哺せらるる間に、何時しか母親に、無意識の戀愛感情を捧ぐるのである。若し、母親が死んで、他の



婦人が、これに代はるときは、その婦人を戀ひするのである。里子に貰はれて行つて、養はれるのも同じことで、孰れの場合に於いても、男の子はその養はれた女性に對して、戀愛を夢幻的に感ずるのである。

それから長じて、戀仲となつた女があると、その女は何處か自分の母親、若くはその身代りの女に、似てゐるところがなければならぬ。顔形や姿ばかりでなく、氣質などでも、母親若くはその身代りの女を、思ひ出させるところがあるのである。それは自分では、氣が附かないけれども、潜在意識に支配されて、さういふ現象を來たすのである。

次ぎは女の場合で、女兒が生れると、これ又、母若くは代りの婦人に依つて、養はるるが、稀れに父親一人で、育てることもある。例へば母は産後の肥立ち悪しく、不歸の人となつたが貧しき生活とて、乳母をたのむことも出来ず、止むを得ず、父はその子を懐に入れて、貰ひ乳に苦勞することを、現はした小説や、芝居もあるが、さういふ場合は、その父に對して、夢幻的戀愛感情を、蓄へるのである。

さういふ女子は、成長すると、何處か父に似たところのある男を、戀ひするやうになるけれども、父の手に養育さるるものは、極めて少いから、女の戀の對象となるものは、男のやうに

多くはないやうに思はるるが、兩親の揃つてゐる場合でも、女兒には父親の方を戀ふ傾きのあつたことは、精神分析に依つて知られてゐる。

かういふ理由であるから、人間はみな、一度は夢幻的な戀愛感情に捕はれて、親を戀ひしたのが成長するに及んで、常態に復するのである。

然るに予が、同性愛に就いて、調査した實例に依ると、三人の青年男子の同性愛者は、三人共早く母に別かれて、父の手に育てられたものであつた。又、一人の女の同性愛者は、早く父に別かれて、母に育てられたものであつた。少數の例だから、これらをもつて、一般を律するわけには行かぬけれども、幼少時代に受くる親の感化は、同性愛の場合に於いては、フロイド氏の説と、反對になるやうに考へらるる。

いづれこの疑問に就いては、後章同性愛の原因に於いて、詳述しやうと思ふに依り、此の點はこれだけにして、次ぎに初戀、又は一目の戀などといふものに就いて述ぶとする。變態性慾の遠因を知るにも必要だからである。

### 第三項 初戀と潜在性戀愛

俗に初戀と稱するものがある。初めて戀愛感情に打たれて、思慕戀々として、禁じ得ざることをいふのである。情操の極みで、大抵は妙齡時代に起こるものであるが、時にはおくれ、中年時代若くは老年になつてからも、起こることがある。執れにしても、純情の發露したものであるが、何うしてかういふことが、起こるであらうか。

これを碎いて言へば、戀を成立するところの感情の要素は、如何なるものであつて、如何なる場合に生ずるかといふことである。従來の説に依ると、戀の要素となる感情の主なるものは第一に、その人の心を動かすものでなければならぬ。然るに此の感動性は、男女に依つて異なり、男は概して、異性の美貌に心を動かし、その女らしき優しさに、魅せられて、戀ふのであるが、女は多く異性の威嚴ある風采、即ち男らしき秀麗に引かれて、さういふ時に初めて、いとし可愛いといふ情操が、湧いて來るのである。

これが即ち初戀で、幼時に蓄積したところの、潜在意識をもつてゐることが、フロイド氏の精神分析に依つて知られたのである。

妙齡時代の戀愛は、斯様にして發生するものであるが、併し男にしろ、女にしろ、たゞ美しい、立派といふだけでは、戀愛は成り立つのではない。戀愛の對象となる人の選擇には、各々特

色があつて、一式には行かぬ。換言すれば、人の戀愛感情には、元來好き嫌ひがあるもので、同じ美しい女、又は立派な男でも、同じ型の戀に入れるわけに行かないことがある。

これには種々の例がある。脊の高く大きいのを好むもの、低く小さいのを好むもの、或ひはがつちりした體格を好むもの等様々で、俗にこれを、蟲が好くとか、好かぬとかいつてゐる。

面白いことは、右の如く戀愛の對象としての特色が、美としての全體を、支配することである。例へば脊のすらりと高い女を好む男は、さういふ恰好でさへあれば、氣に入つて容貌の方は、餘り問はないといふが如きである。これに就いて、かういふ例が、明治二十九年頃にあつた。

地方で資産家の息子であるが、何ういふ理由か、嫁を物色するに、脊の高い髪の縮れた女といふ注文であつた。高いと云つても種々あるが、どれ位高いのと聞けば、五尺二、三寸の瓜實顔で、髪のちぢれたのといふ。西洋の女なら五尺二、三寸は普通だが、日本の女で、五尺二、三寸といへば、大女で餘り多くはない。

さては西洋の女に憧憬れて、あゝいふ體格を好むやうになつたのかと、聞いて見ると、さうでもないらしい。だがその息子のお母さんが、體格のがつちりした脊の高い人で、髪も縮

れてあつたといふところから、友人等が變に噂を立てたのも、無理はなかつた。

周囲の話に依ると、彼は子供の時から、非常にお母さん最負であつたことは事實で、お母さんもまた、彼れを可愛がつてゐたといふ。と云つても別に何といふこともなく、たゞ感情と愛情と結びついたので、親子はかうありたいものである。

併し彼れは、自分の妻とする女のスタイルを、母に採つたことは勿論で、母のやうな型の美人を望んだのである。だが田舎では、さういふ女は見付からなかつたところから、東京へ出て来て、嫁探がしをしたのであるが、思つたやうな女はなかつた。

今日ならば縮れ毛を喜んで、故意と髪に鍔を當てたり、雷氣をかけたりにして縮らすことが大に流行つてゐるから、何でもないのであるが、その頃は縮れ髪を嫌つて、下卑だの、淫亂だのと貶したものである。さういふわけで、理想の女は見附らず、

「矢つ張、東京も駄目か」と、悲觀せざるを得なかつた。

ところがその年も暮れて、正月の歌留多會に、友人の家に招かれ、一つの組になつた女は注文通りの大女で、髪も縮れてあつた。彼れは胸を轟かして、それとなく友人に聞いて見ると、その友人の又友人で、親戚の娘といふことがわかり、そこで彼れは一切を打ち明かして、

仲介の勞を取つて呉れるやうに依頼した。

友人は快諾して、先方へ懸け合つて見ると、その家でも、餘り身體が大きい上、髪の手が縮れて貰ひ手がなく、困つてゐるところなので、早速承知し、それから話しが進んで、目出たく華燭の典を挙げ、息子は新婦をつれて、國に歸つたといふ。

## 第二節 戀愛感情と瞬間の戀

右のやうに、戀愛感情に於ける戀人の選擇は、種々様々であつて、甚だしいのになると、藝食ふ蟲も好きくとやらいふ如く、随分變つた異性に、戀着するものもある。これ決して異例ではなく、さうなる理由があるのである。その理由といふのは、幼時に養成された潜在意識が、戀愛感情の基礎となつて、好き嫌ひを現はすのである。

此の戀愛感情が時とすると往々にして、突然に發現することがある。俗に謂ふ一目の戀ひなるもので、予はこれを瞬間の戀といふ方が、よからうと思ふ。普通に、男女の相思相愛の仲となるのには、交際する中に、互ひの美點に感激して、成立するものであるが、瞬間の戀になると、かつて交際したこともなく、又は識り合ひでもないのに、偶然たゞ一目見ただけで、直ぐ

に戀着して了うのである。何といふ不思議な戀であらう。

かういふ瞬間の戀愛として、擧げらるる例は、今日も多くあるが、特に昔の物語りに、甚だ多くあることは、小説や講談等に、現はされてゐる。これは潜在意識の戀愛感情が、俄然發露したものであること、再び言ふ必要はなからう。その例枚舉に遑まないが、その中人口に膾炙してゐるものを、擧げて見やうと思ふ。先づ文藝に現はれたものからいふて見やう。

圓朝作の「牡丹燈籠」に現はれたお露と新三郎との戀。お露は繼母のお國と折合はず、向島の別荘に保養中、出入りの醫師に伴はれて、遊びに来た新三郎を、一目見た許りで、お露は恍惚となり、それより新三郎を忘るることなく、思ひつめた揚句、病床に臥して、遂に歸らぬ旅に赴いた。新三郎はあとでこれを聞き知つて、大に歎き悲しみ、自分も病の人となつて、お露を思ひつゞけてゐる中、おつゆの亡靈と相會するのであるが、やがて新三郎も死んで了ふ。

何人にも知られてゐる「朝顔日記」の深雪は、宇治の螢狩りで、陶澤次郎左衛門を見染めてから、これを戀ひ慕ふこと切であつたが、父の夫定めしその人は、次郎左衛門と異名同人といふことを知らず、立てし操を破らじと、淨瑠璃の文句にある通り、家を脱け出て深ひ歩

く中、つひ眼を泣き潰して、盲となるも、なほ探がして止まなかつたのも、瞬間の戀故ではある。

前のおつゆといひ、此の深雪といひ、瞬間の戀の中で、これほど強烈なものなからう。瞬間の戀の好標本と謂つてよい。辨慶ですら、一目の戀はあつた。

堀川上使での物語りに依ると、まだ稚兒櫻の辨慶が、十六夜の月よりも美しい娘の危難を救ふたのが縁のはし、此方思へばその人も、心引かれて、契りし松と松との若縁といふ文句に依れば、孰らも一目で、成り立つた戀に違ひないであらう。

それから「美少年録」にある、お夏清十郎も、一目の戀であつた。お夏は遊里の娘であるが、一日悪漢共に誘拐されて、危き折柄、通りかゝつた陶清十郎（信房）に救はれてから、これを慕ふて契りを罩め、遂に割なき仲となつたのは、男の恩義と義勇とに感激した故であらうが、それよりも主なる原因は、清十郎の秀麗な姿に、打ち込んだためで、二人は一目で戀ひし合つたのである。

次ぎに英雄と佳人との戀愛にも、數多の例がある。面白いものを擧げて見やう。僧文覺の前身遠藤盛遠は、武勇の勝れた武士であるが、一日渡邊橋の橋供養にて、盛んに

式の擧げられた際、薄絹を被いで見物に來たれる袈裟を、一目見て心を動かし、その母衣川に迫つて、袈裟を心に従はせやうとした。併し袈裟には、己に定まれる夫のある身の上、何とて棲ならぬ棲を重ねられやう。それがために袈裟は、母と夫との間に挟まり、盛遠が毒刃にかゝつて、一命を落した。

平清盛は、平治の亂に、敵將源義朝の愛妾常磐を見て、これを容れたばかりに、彼の女の願ひ通り、三兒の命を助けて、平家の禍ひを残したのも、一目の戀から起つたものである。

瀧口時頼は、小松殿(重盛)の侍で、君の覺え目出たかつたが、建禮門院の曹子、横笛を垣間見て慕戀し、それからといふもの眷々として、日夜忘れなかつた。併し驕然悟るところあり、髪を剃つて、嵯峨の往生院に入つた。横笛これを聞いて、憐れに思ひ、その寺を訪れて、心のまことを告げんとしたが、一旦佛門に入つた彼は、聽かなかつた。横笛も戀のはかなさを悟つて、これまた尼となつた。

### 第三節 相思相愛の戀と片思ひの戀

時頼の戀は、遂げ得ずに終つたが、横笛のこれに同情したことは勿論で、彼の女も時頼に、大事な戀情を捧げたことは明かである。して見ると、たとひ二人の戀は成らなくとも、美しく清き心に、生きたといふことを謂ひ得る。又、シエークスピヤの作にあるロミオと、ジュリエットとの戀は、最もよく二人の眞心を明かにして、その元は矢張一目の戀であるが、それが深くなつて、二人は到頭、死なねばならぬ破目となつたのである。

此の物語りは、みな人のよく知るところであるから略すが、二人の戀愛感情の、相一致してゐることは言ふまでもない。斯く戀愛感情の一致して、相互に思慕するものを、相思相愛の戀と云ふが、恐らくは潜在意識の戀愛が、兩方共に相合するためであらうと思ふ。これを圖解すると、

(男 = 潜在意識の女性に一致せる女) + (女 = 潜在意識の男性に一致せる男)

の如くならねばならぬ。此の相思相愛の戀に對して、片思ひの戀といふものがある。次ぎに述ぶるであらう。

さて戀は、人を盲目にするといふ如く、如何なるものも、これに打ち克つことが出來ない。

それでかういふ場合に、もしも一方が、戀の反逆者であるか、或ひは之れを裏切つて、見捨て  
るやうなことがあると、その戀が、破れるに決まつてゐるが、人に依つては、失望と落膽とに  
悲觀して、病となり、或ひは自殺して果て、或ひは怨恨、嫉妬の焰に身を焼いて、對手を呪ひ  
殺すやうに至る者もある。實に恐るべきものも、戀の執念で、これにも多くの例がある。

芝居でする道成寺で、清姫の執念が演ぜられてある。清姫は長者の娘であるが、一夜の宿  
を供した旅僧の安珍に、一目の戀を爲して、種々と口説いたが、沙門の身として、浮いたる  
心の無い安珍は、體よくこれを斷つて、密かに宿を逃げ出した。

あとでそれを知つた清姫は、嗔恚の情火を燃やして、安珍の後を慕ひ行つたが、日高川に  
隔てられて、渡ることを得なかつた。そこで清姫は狂亂となり、河中に身を投じて大蛇とな  
り、易々と川を渡つて、安珍の隠れてゐる道成寺の鐘を、七卷八卷に取り巻いて、鐘諸共に、  
安珍を焼き殺したといふことである。

人間が大蛇になる筈はなく、これは女の執念深いことを、傳説化したのに過ぎないが、そこ  
には一目の戀、而も片戀のはかなさを、あらはして、哀れを止めてゐる。これに似た片戀の例  
は、清水寺の僧清玄に於いても見られる。

清玄はもと、高德の僧であつたが、櫻姫を垣間見てから、急に戀風に染みて、寢ては夢、  
醒めては現の中に、姫の姿があり／＼と見えて、我れから陥る煩惱の苦しみに堪えず、遂に  
は浅ましくも狂死して、醜名を流したのは、よく／＼深く姫を戀したものと見える。  
孰れにしても戀愛感情には、深い根柢があつて、潛在意識の理想と、一致せる異性に逢ふ時  
は、相思相愛となるのであるけれども、それがもしも、理想的の人でなかつた時には、その戀  
は多分成立せざるべく、たとひ成立しても、後に敗れることが多からうと思ふ。

片思ひの戀といふのは、單に一方のみ、潛在性の戀を寄せ、一方はこれを缺いてゐる場合  
に、起るものであつて、かうした戀は如何に強烈でも、成立することは殆んど無からう。之  
れを圖解すると、

男の片思ひの戀

(男=潛在意識の女性に一致せる女)+(女=潛在意識の男性に一致せる男)

女の片思ひの戀

(女=潛在意識の男性に一致せる男)+(男=潛在意識の女性に一致せる男)

となるのである。

第四節 片思ひの戀と變態性慾

相思相愛の戀は、多くの場合、末が遂げられるので、前述の如く、常態にて生活が、順調に營まれるけれども、片思ひの戀にあつては、破れかぶれに荒んで、あられもなき舉動に、奔るものである。例へば男にては放蕩、姦通、無理情死等の如きで、女には私通、姦通、賣笑などに陥るものが多くある。同性愛も、かういふ種類のものから、誘はるることがある。世人はかゝる不節操の者を呼んで、浮氣といひ、或ひは多情多淫と謂つてゐるが、精神分析の上から觀察すると、潜在性の戀を、得遂げないためで、さういふ者は、あれかこれかと、探がし廻はる内には、同時に二人或ひは三人にも、思ひを懸ける者もある。これ他なし、潜在性の戀に當つた者が、同時に數人あつたからで、さういふ例の者は、實際に少くない。戀愛の心理は、大抵これで判明し、その變態的な戀愛から生ずる罪惡も、敍上の事實で、理解することを得る。併しそれがために、一夫一婦の制を破つて、他の異性と通じたり、或ひは一時に、數人の異性と關係するといふのは、たとひ潜在性に適合して、學術上興味ある問題

としても、その行爲は、道德及び法律に違反して、社會を破壊する罪惡である。これは周知の事實で、茲に言ふを要せぬ。

近來名ある文學者や、上流の人士間に、よく行はるる姦通や、情死又は三角戀愛など、忌ましき問題の起るものも、かうした原因が、伏在してゐるからだと思ふ。だが、世にはこれを以て、戀愛至上だの、戀愛の極致だのといふ者もあるが、モボ、モガが、如何に貞操を無視しても、貞操は自己を保護し、又は品性を高むる上に於いて、必要なるのみならず、優良なる子孫を擧ぐるにも、缺くべからざるものであることを、忘れてはならぬ。

第五節 戀人を定むる心理

上來の説述では、戀の相手となる異性は、潛意識の中の戀人に、似た人であることは、最早、言明するに及ばないであらう。併しただ理論的に、かう云つただけでは面白くないから、ここに實例を擧げて、事實を證明しやうと思ふ。以下は、ブリウエル氏（五八頁參照）の示したものである。

第一例 肥滿せる婦人へのみ亢奮する紳士

此の紳士は、高き修養を積み、謹厳にして婦人に無關心であつたが、たゞ肥満せる婦人を見るときのみ、性的に亢奮するのであつた。精神分析の結果、此の紳士を育て上げた者は、母親の代りになつた肥満の乳母で、それが潜在意識となつて、働いたものであることが知られた。

第二例 跛の男に亢奮する婦人

或る高等教育を受けた二十四歳の婦人、夫はあるけれども、或る病患のために、性的衝動することはなくなつた。併し跛の男を見たときだけは、色慾を感ずるといふ世にも珍らしい症状に、これが精神を分析して、次ぎの事實を發見した。

此の婦人が三、四歳の頃、その母親は、夫の目を忍び、或る男と關係して、それと密會することが多くあつたが、その母は、幼兒には何の考へもないものと思つて、少しも秘密にすることはなかつた。然るにその情夫は、誤つて脚を挫き、これが原因となつて、跛となつた。それ以來母の方から、出向かなければならなかつたが、併し夫の手前、又は世間の風評を防ぐために、故意とその幼女を、一緒に連れて行くのであつた。歴とした夫のある身で、仇し男と契る妻も妻なら、これに感づかなかつた夫も、お人好しではないか。日本では町内で

知らぬは亭主ばかりと云つてゐるが、これに漏れないのである。

それは別の話したが、その夫はお目出たく、此の世を終つたので、妻は公然その情夫と結婚して、同棲するやうになつたが、その時に深く印象した義父の姿が、彼の女の腦裡に残りそれが潜在意識となつて、不感症なるにも拘はらず、跛の男のみは、性慾と結びついて、亢奮するのであつた。

第三例 父親に似た男と結婚した婦人

これは前例に似て、若い有夫の婦人であるが、夫と同棲中に、幾人かの男と道ならぬ關係を結んだ。精神分析の結果に依ると、此の婦人は一人娘で、特に父親の愛娘であつたが、父親は業務の都合上、家に居ることが少かつたので、幼き時分に、父親を見ることが稀であつた。

併しその記憶を辿つて行くと、父親の留守中に、母親は不貞にも他の男達と戀に落ち、密會するところを、幾度か見た覚えがある。斯くして成長の後、自分を可愛がつて呉れた父親そつくりの男で、而もその職業までも、父親と同じ男と結婚したが、貞操を守りかねて、母親同様に、不義の快樂に耽つたのである。



以上は、ブリウエル氏の示したものであるが、予の知れるものに、かういふ例がある 而白  
 と思ふから、ここに掲ぐるであらう。

某の妻は、夫の死亡後寡婦となつて、あとに残れる數人の子供と、生計を立ててゐたが、  
 逝く者遠しの譬への如く、次第に寂寞を感じて來た。而も中年で燃ゆる情火は消すに由なかつた  
 となつて見えて、亡夫の菩提を弔ふために、屢々墓參し、その都度寺の住職に會つて、回向を  
 依頼することが常であつた。

住職は、好い容貌ではないが、亡夫に似て、應待も巧みであつたところから、彼の女は心  
 を動かし、何時しか道ならぬ戀に陥つて仕まつた。ところが不義の制裁は靦面、彼の女は妊  
 娠して、最早袖にて隠されぬ状態となつた。驚いたのは、彼の女ばかりでなかつた。住職も  
 心を痛めて、何か怪しき藥をすゝめた。彼の女は喜んで、これを服すると、胎兒は流れたが  
 母の生命も共に無くなつた。

これだけならば、よくある話で、別に珍とするに足らぬが、數年後彼の女の娘が、兩親  
 の墓參りに、度々寺を訪ふ中に、これも何時しか住職と嬉しい仲になつた。彼の女は二、三  
 度母につれられて、住職に逢つたことがある上に、母との關係も、薄々知つてゐたので、何

物か彼の女の心を、唆つたものがあつたであらう、

斯くして構曳きする中に、娘も母同様に妊娠した。處置に困つて、勧めらるるまゝ、例の  
 怪しい藥を服むと、苦悶を始め、到頭母のあとを慕つて行つた。世人はこれを不貞、不義の  
 罰と噂し合つた。

精神分析學の上から見ると、母は亡夫の佛のある住職に魅せられ、娘は父に似た彼れに、  
 戀着したといふことになる。併し母子とも、同じ運命に果てたのは、佛のみ罰かも知れぬ。

### 第六節 戀人は妹に生寫し

なほ、ブリウエル氏の擧げた例が多くある。その中には戀人が自分の妹に、生き寫しのも  
 のもある。これに就いてブリウエル氏は、母に似たものはその娘で、姉妹は、他の如何なる婦  
 人よりも、最もよく、母親の姿にあてはまることは、極めて明かである。何人が娘以上に母親  
 に似てゐるであらうか。それに娘は、若くして美しいといふ點に於いて、母親よりも、有利な  
 る位置にあることも、勿論であると言つて次ぎの實例を示した。

ブリウエル氏の友人は、十四歳の時、獨逸から米國に渡つて來た。その時本國には、母と

妹とが残つてゐたのである。

數年を経て、彼はニューヨーク市の中央館に開かれた共進會を、見物に行つた。そして圖らずも、場内で出會つた若い婦人を、一目見ると、忽ち烈しく衝動して、魂を奪はれて了つた。その魅力の強さは、非常なもので、陳列品は見向きもせず、たゞその婦人の跡を、踵け廻はすのであつた。

此の時もし、他に多くの見物人がゐなかつたならば、必ず監視人に、怪しと目をつけられたに違ひないが、共進會場だけ、誰も怪しと思ふものもなく、根氣よくその婦人を追ひ廻はす中、彼の女は館から、外へ行つて了つた。

そこで彼れも、直ちに館を出て、その跡を慕ふたのであるが、離踏の群衆に紛れて、つひに行方を失ひ、茫然として宿へ歸つたものの、煩悶して數ヶ月の間は、何事も手に附かず、只管彼の婦人ばかりを、思ひ續けるのであつた。併し何處の婦人かわからぬと諦めてはゐたものの、それでも數年間は、此の時の婦人を標準として、他の婦人を物色したのである。

斯くして十八年を、米國に過した彼は、本國(獨逸)の生まれ故郷に歸つて來た時に『をや』と、驚異と喜悅との叫びを、思はず漏らした。見ればそこに、十八年前、共進

會場で出會つた婦人が、ゐるではないか。だがそれは、彼の求むる米國の婦人ではなく、彼の同胞の妹であつたのだ。

何故、彼は自分の妹を、彼の時の婦人と思つたであらうか。言ふまでもなく、見もし知らぬ若い婦人と、妹とは、實によく似てゐたからで、その妹はまた、母親と生き寫しであつたのだ。

本例は、自分の幼馴染みであつた妹に、生き寫しの米國婦人を、一目で戀ひしたのであるが、その妹は母によく似てゐたとすれば、彼は無意識に、母を戀ひしたことになる。共進會で、見もし知らぬ婦人の跡を、つけ廻はした時には、妹のことを思ひ浮べもせず、又、母親の姿と比べてゐるのでもなかつたのであるが、その實、彼は以前に戀ひした婦人と母親とを、仲に妹を立てて、比較したことになるのである。

之れを要するに、男女の妙齡になつて、初めて定むる戀人は、孰れも己が母親、又は父親、若くはその代はりとなつて、養育して呉れた人に、似たものであるといふことになる。

併しこれに就いては、注意しなければならぬことがある。それは戀愛感情と衝動との關係で、その自己の親又はその代りとなれる者に、似た人に戀ひするのは、もとより有意識でないので

あるが、併し多くの異性の中から、選出する戀人は、潜在意識となれる戀愛感情の、支配を受けて、無意識に比較するのである。換言すれば自分ではそれと気が附かないけれども、潜在的戀愛の人に似た人を見たときに、初めて衝動して、之れを慕ふやうになるのである。

### 第七節 夫婦の容貌類似

枝葉に渉るけれども、序でだから一言するが、戀愛結婚で夫婦となつたものならば、夫婦の容貌が、何度か似てゐなければならぬ。

俗に似たもの夫婦といふ喩へもある如く、心構への似た夫婦は、幾らもある。これは夫婦として必要なことで、心の近いものでなければ、和合して行かれないことは、言ふまでもない。それで夫婦の心の、似て来るのは自然で、不思議はないが、容貌まに似て来るのは、何ういふ理由であらう。否、これは似て来るのではなくして、似たものが夫婦となるから、似てゐるのである。前に相思相愛の條に於いて説いた如く、男も女も、潜在意識に合致して、夫婦となつたものとすれば、必らず多少似なければならぬのである。

之れを例すれば、夫が圓顔なれば、妻も多くの場合圓顔である。又、面長な夫には、矢張面

長の妻が配し、がつちりした夫は、がつちりした妻をもつてゐるなど、一々枚舉にいとまないが、この事實は、前上の理由から來るのである。

變態性慾の遠因たる潜在意識の説明は、これで終つた。次ぎは倒錯症としての同性愛が、何うして生ずるかである。この原因を述ぶるであらう。

## 第二章 同性愛の原因及び兩性の區別

### 第一節 同性愛の本質

#### 第一項 同性愛の濫觴につき歴史上の事實と人類學上の事實

最も神秘的で、而も極めて趣味に富める同性間の性慾又は戀愛は、單に同性愛 Homosexualität, Homosexualie. ともいひ、古くから特殊の男女間に、行はれて來たものである。特殊とは病的、又は變態的なるものであつて、常識を逸したものの謂ひである。斯様な人は、男にも女

にもあるが、併し一般的でないだけ、奇異なる現象として、注意せられてゐる。同性愛の原因は、随分込み入つて、一朝一夕に説き竭くせないから、追々述ぶるとして、先づその起源から尋ねて見るに、歴史家は、時代に現はれたる事實を證として、何の時代、何の人より、始まつたといつてゐる。例へば希臘では、男性間に行はるる戀愛をもつて、プラトーンより始まつたものとなし、又、女性間性愛の方をば、サッフオーを嚆矢として、前者にはプラトニック・ラヴ、後者にはサッフイスマズ Sapphisms と、命名せるが如きこれである。我が國に於いても、濫觴の時代を指せるものに依ると、極めて古く、三韓征伐時代に端を發してゐる。

併しながらこれは、歴史に現はれたる事實に、基づいたものであつて、起源ではない。これは我が國ばかりでなく、希臘でも、印度でも、その他何れの國に於いても、歴史を證としてゐるけれども。科學上から觀ると、事の起りは、歴史家の言ふ如く、時代的のものではなくして、遠く有史以前に、遡らなければならぬ。換言すれば、人類學上の見地に立たなくてはならないのである。歴史家は歴史上の事實を、證とするけれども、有史以前のことは、人類學者の領分で、人類學上の證左に従はなければならぬ。

この事實に依ると、同性愛の起源は、遠く原始人に發したことは明かであつて、人類あつて以來のことと、考へなければならぬ。何となれば同性愛は、普通の異性愛と同じく、多少何人にも、その性癖が含まれてゐるからである。例へばモル氏（四七頁）の謂はゆる無差別に於ける、子供の同性愛の如きで、此の時代の子供は、異性よりも、むしろ同性の方に、興味を有して、これを受するものである。又、クラフト・エビング氏（五三頁）の言へる、精神的半陰陽の如きも、大人の間存すること多くあつて、その數は程度の問題なるが如きこれである。此れ等はみな、同性愛の萌芽として、一般人類に賦有せられたるものと、看做することが出来る。

## 第二項 同性愛の事實

然るに同性愛といへば、人はみな、非常に變つたものの如くに思惟して、心理學者はこれを變態的と名づけ、精神病學者は、これを倒錯症として、不自然なものとした。斯様にして同性愛は、主に心理學者と、精神病學者との領分に屬して、専らその方面から、研究されて來た。故に同性愛は、言ふまでもなく變態的のものに違ひない。又、倒錯症のものたるにも相違な

い。又は不自然にして、常態の戀愛に、反する者なるにも疑ひはない。併し性の表面を蔽へる、神祕のヴェールを剥ぎ去つて、その本質を露はすときは、今まで不自然として、或ひは倒錯症若しくは變態性として、繼子の如くに取り扱はれて來た此の同性愛は、矢張異性に對する戀愛とその本質を同じうして、變はりのないものであることが、了知せらるるに至つた。

此の理由を、少しく詳述すれば、同性愛の源は、男女とも、各自の體中に含める他の異性分の、精神的に發達して、多少異性化してゐるにより、その異性化したる性分が、他の同性に對しては、異性に相當するところの、同性に向つて、戀情を有するやうになつたものである。

それで同性愛は、男性及び女性共に、その本質に依つて、各々これを二種類に、大別するこ

- 一 單性的同性愛、
- 二 複性的同性愛、

であつて、男性愛なるときは、

- 一 男性間單性的同性愛、
- 二 男性間複性的同性愛、

又、女性愛なるときは、

- 一 女性間單性的同性愛、
- 二 女性間複性的同性愛、

となるのである。

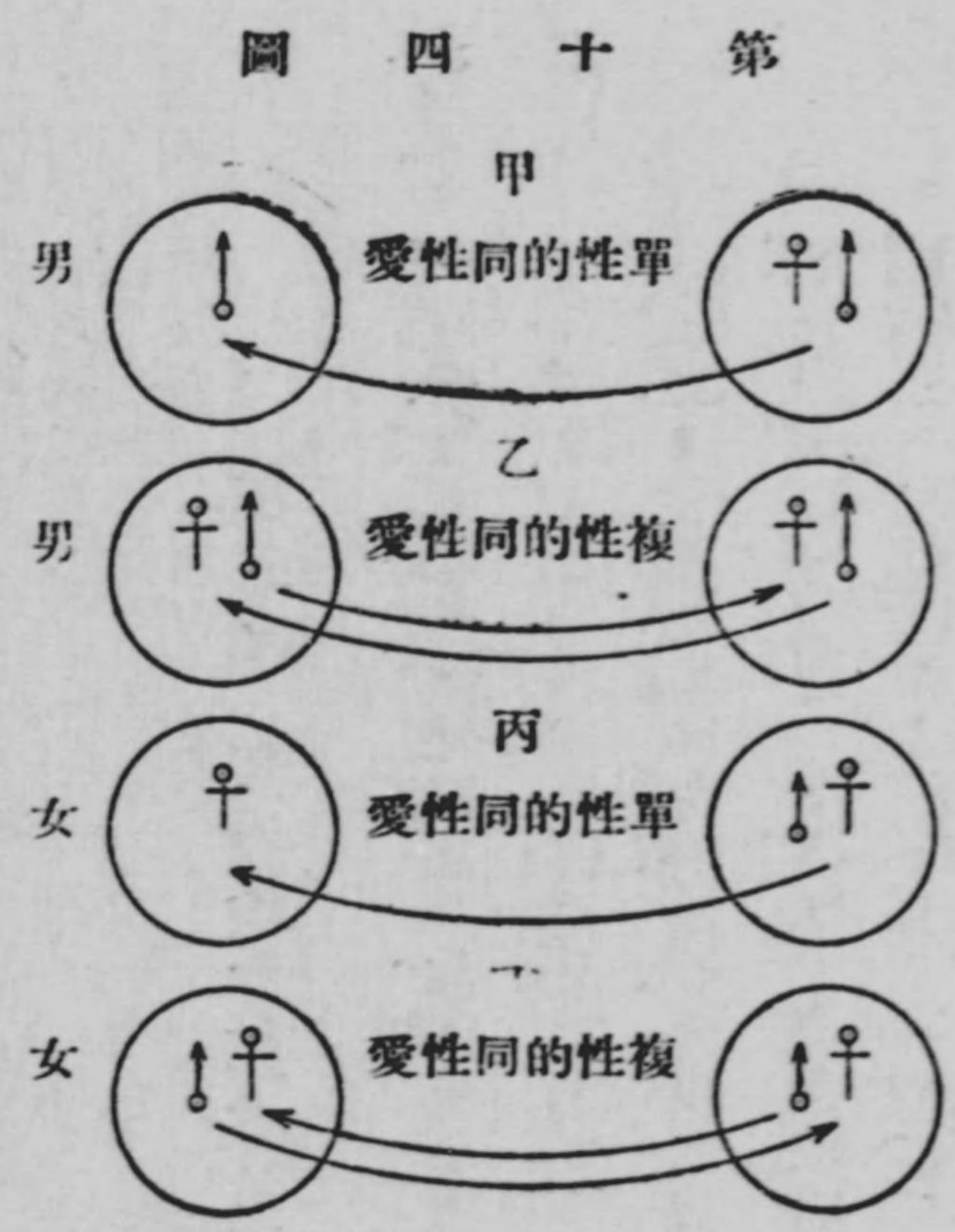
### 第三項 同性愛を成せる單性と複性との區別

如上、單性複性兩種の同性愛は、如何なるものである乎。その原因を知るには、生物學に遡らなければならぬが、詳細は後にして、茲には單に、その區別を説明するに止める。

單性的同性愛は、男性又は女性の體質中に、含有する異性分の發達して、他の同性を思慕するもの（第一四圖の甲、丙）を謂ひ、複性的同性愛は、これと異つて、その男性又は女性の質分中に、含有する異性分が、他の己れと同様に發達せる同性に向つて、各自反對に愛着するもの（第一四圖の乙、丁）を、謂ふのである。これ各個の體中には、他の異性が含まれてゐるためである。

生物學上の原則に依れば、各生物は、男性及び女性共に、もと兩性の合一に依つて、生じる

ものであるから、本来は兩性を含める雌雄同體 Hermaphrodite と謂ふことを得るものである。そこで潜在的に、男性又は女性の體中に、含有してゐるところの異性分が、發達するときは却つて本性の方が、殆んど或ひは全く、その用を爲さざるに依り、その異性分が他の同性に向



べく、後天性のものは、主に異性に對する、性慾の壓迫、或ひは禁斷より來たれる煩悶の、反動と謂ふことを得る。

た如くである。斯くの如く潛伏せる異性分の、特に發現するのは、如何なる理に依るかといふに、これは先天に、異性分を多く含み來たれるものと、後天的に發達し來たれるものとの二種に別かつことが出来る。此の先天性のものは、半陰陽の變性と看做することを得

第二節 同性愛の起源とその動物より人間に傳はれる徑路

第一項 同性愛の起源に關する二説及び生物學上の事實

同性愛の起源は、甚だ遼遠にして、これに歴史家と、科學者との二説あることは、前節に述べた如くであるが、種々の考證から推して見ると、同性愛は何うしても、有史以前より、始まり、而も下等動物に胚胎したのが、人類に遺傳して、今日の如き状態となつたといふ説が、事實らしくある。

されば同性愛に於ける性的感情は、たとひ變態的にしろ、又は倒錯的にしろ、その初めて之れを覺へた人間は、原始時代の人類であらねばならぬと思ふ。これに就いて、先づ生物學上より、下等動物に、果して人類に行はるるが如き同性愛、若くはこれに類似せる事實の、有りや否やを、尋ねて見やう。多くの動物中にて、雌雄數の等しからずして、雄の雌よりも、非常に多いものにあつては、その雄性間に、自ら性的關係の起ることあるは、往々見るところであつて、この種のもは

昆虫類に多くある。

これを例すれば、蚊、蜜蜂、或る種の甲蟲等の如き、一雌多雄 Polyandry の如きものであつて、此の場合には、雌を得ざる雄間に、二様の異なる現象の、生ずることがある。即ち

- 一 雄性に於ける闘争、
- 二 同性間に於ける性的行爲、

とで、興味の深いものである。

雄性間の闘争は、雌の数が少いために起るもので、闘争に勝つたものは、當然雌を得るのである。その行爲は、闘争であるけれども、雌を得るためであるから、性慾に支配された行爲であることは、言ふまでもない。

此の場合に、雌を得るものは少数で、大多数は雌と交はることを得ざる結果、その異性に對する要求を、同性に向けるやうになる。

かゝる同性間の性慾に於いては、同性の一方即ち弱い者が、受動的に供せられて、強い者より、烈しく攻撃せらるるために、その苦痛に堪えずして、逃げ出すと、それを追ひ廻はし、或ひは之れがために、死に置かるることもある。併しこれは第一の場合に於けるが如く、闘争の

意味ではなく、強者が情慾を満足するための行動であることを、理解しなければならぬ。

強大なる雄が、弱小なる同性を追及して、前條の如き悲劇を演ずるものは、蜜蜂である。女王と交はることを得ざる雄蜂は、性慾の壓迫に堪えずして、同じ巢中の職蜂（即ち働蜂といふもので、元は雌性であるが、榮養の關係に依つて、中性となつたもの）を捕へ、或ひはこれを攻撃するに依り、往々にして職蜂の死することがある。他の場合に於いては、同じ雄蜂を求めて、これと交はることもある。

雄性の牛、羊、馬、犬等に於いても、異性と隔離するときは、同性同志に交はることがあるもので、オットー・ワインゲル氏の説によると、かゝる場合には、同性相親しむか、或ひは自慰的行爲に、陥るといふことである。

鳥類に於いても、面白い現象がある。鳥が卵を生まなくなると、自ら嘴をもつて、その生殖器を刺戟することあるのは、これをもつて産卵を促すと同時に、自慰を營むものであるといふことである。自慰と同性愛との間に、關係のあることは、別頁に述ぶるが如くである。

## 第二項 隔世遺傳と環境

如上の事實に依つて、これを考ふるときは、同性愛は又、或る動物に行はれたもので、それ等の動物は、異性と交はることの出来ないときに、これを行ふて、満足してゐたものと謂ふことを得る。併しそれは一時的、或ひは精神的半陰陽の類であつて、生殖機能は、別に兩性に依つて、營まれてあつたが、それが隔世遺傳 Alavismus の理に依つて、人間に行はるるやうになつたものと考へなければならぬ。

ロムプロゾー氏（四九頁）が、人間に犯罪性のあるのは、隔世遺傳に依つて、太古の蠻人より、遺傳したものと主唱した如く、同性愛も動物を祖とする吾人々類が、その祖先より傳はつたところの、一性質に違ひない。これが全くの先天性で、此の性質を有する者に限り、本能的に賦與せられたものと、看做して差支へはない。

併しさういふ人は、特殊の性格を有するもので、普通の人と異なるのみならず、その數も極めて僅少であらうと思ふ。換言すれば同性愛の素質は、人類一般に稟賦してあるけれども、その素質の特に發達した者に限つて、同性に對する感情を有し、然らざるものには、これを有することはないからである。

斯様に同性愛は、動物を起源として、それから人類に傳はつたものであるが、その素質を有

するもの（即ち先天性）は、割合ひに少く、これに反して後天性のものは、甚だ多いのである。そこでこの後天性は、如何なるものであるか、これに就いては、少しく説明しなければならぬ。同性愛の要素は、隔世遺傳の理に依つて、人類一般に、賦與せられたものであるけれども、生來的には現はれないで、環境から馴致せられ、それに依つて潜在せる素質の、發生を促されたものが、即ち後天性なのである。環境の事情には、疾病や暗示、模倣及び習慣等、種々あるが、それらが動機となつて、後天性の同性愛を誘成するのである。

さういふ理由で、先天性と後天性とは、その本源が異なるにあらずして、等しく隔世遺傳であるけれども、その素質の、生來的に現はるるものと、生後に發生するものとに依つて、區別せらるるのである。なほこの理由に就いては、前に示した第一四圖甲より丁までを、参考すれば、明白に了解せらるるであらう。

### 第三項 同性愛と自慰との關係

茲に同性愛に就いて、見落すべからざるものが、なほ一つある。それは自慰的遂行爲で、

第二の天性とも謂はれてゐるほど、廣く人類に共通せられてゐる。けれども其の特に、多く濫



用せらるるものは、未婚の少年少女、若しくは中年の獨身者等であつて、自慰癖を有するもの、及び性慾の壓迫を蒙り得る者等に、多く發見せらるることは、緒論の第二節に述べた如くで、再び言ふまでもないところである。

この自慰の進んだものは、男性では獸姦と男色とで、稀れには屍姦に陥るものもある。又、女性にては女性間性慾、ウラニスムス等となり、それから、淫亂症となるものもある。

生物學上より言ふと、自慰は馬、犬その他の動物にも、行はるることあるは、前に述べた如くで、これより人類に傳はつたものと思はる。而して人に於いて、其の初めに現はれたものは、原人であつて、彼れ等に自慰が行はれたとすれば、同性愛の原人より始まつたことは、推測するに難くはない。

世人は自慰をもつて、甚だ卑猥なものと信するけれども、原人はこれを神聖なるものとして、性交と同じく、公然とこれを行つた形跡がある。それは生殖器神が、野蠻時代から世界の各地に祭られて、あつたことや、蠻人の住んでゐた岩窟から、發見せられた種々の裸體彫刻などから推して、想像せらるるからである。

勿論これ等は、多く獨身者で、異性と交はることの出来ないものが、これに依つて自ら慰藉

を取り、或ひは同性同志に、愛を交換したものらしくある。

斯様に同性愛の起源を論ずるには、先づ生物學を基礎として、その事實を、下等動物の上に乗せなければならぬ。次ぎは人類學及び民俗學で、原人（濠洲土人の如く、最下等の蠻族）を辿り、それから風俗史を根據として、その時代を調査することが必要である。

### 第三節 先天性と後天性との區別

さて同性愛の原因を、追究するときは、先天性と後天性との二種に、別かたることを前既に述べた如くであるが、先天性説は、クラフト・エビング、モル及びフェレー諸氏、これを主張し、後天性説はシュレー、ノツチング及びビネー諸氏に依つて、唱道せられた。

此の先天性説に據るときは、古代のソドマ、ゴモラを首めとし、希臘、羅馬及び我が國の薩摩等に行はれたる、地方的同性愛は、單に模倣、若しくは虚榮の結果ではなくして、確かに祖先の習慣を、遺傳したものと、考ふことが出来る。何となれば彼れ等の、同性に親しむ性質は、幼少時からであつて、成長の後も、變ぜざるのみならず、此の種の人は、其の土地を換へて、他の地方に生活し、又、兩親は他國に移住して、そこに生まれた子も、親の性質を享受して、

矢張、同性に親しむ傾向を生ずることが、多くあるからである。

モル氏は、幼年にして同性に親しめるものの例、數多を示し、クラフト・エビング、フェレ  
1 諸氏の例にも、かういふ種類のもものが少くない。

併しシュレー氏等の説に依ると、同性愛は、遺傳ではなくして、すべては後天的に、獲得したものと、爲さなくてはならぬ。此の後天性説も、たしかに一面の眞理は、含んでゐるけれども、全然先天性説を、排斥する譯に行かないことは勿論であつて、ビネー氏の如きも、同性愛を先天性より分離するときは、薄弱なる根據となつて、單に後天的に、獲得したものとすることの能はざるを、認めたるやうである。

近時の研究に依れば、クラフト・エビング氏説とシュレー氏説とを、折衷したる新説は、最も勢力があつて、大部分は先天性に基づき、一部分は後天的に來たものとせられた。此の折衷説は、單に仲裁的に兩説を調和したのではなくして、科學上から期せずして、茲に至つたものであることを、記憶しなければならぬ。然らば科學は、同性愛の説明に、如何なる新事實を提供したか、先づこれを説述しなければならぬ。

#### 第四節 細胞性と潜伏性

さて人間を始め、あらゆる生物は、雌雄に依つて、形質 Character を異にしてゐるけれどもその體質は各純然たる單性ではなくして、共に兩性の混じたものであることは、前にもちよつと述べて置いたが(一三四頁)、此の説は久しき以前から、學者の知るところであつた。即ち古代にあつては、希臘のアリストートル氏(四二頁)、初めて之れを唱へ、近世にては白耳義の生物學者フォン・ベネーデン Von Beneden 氏が、これを生物學上から證明した。

尤もアリストートル氏の之れに關する説は、明かに傳はつては居らぬけれども、これを推考すると、男子も女子も、兩性分より成つて、身體は男、女と別かれてゐるけれども、その體質は、兩性であるといふことである。

併しアリストートルは、何ういふ理由で、男女は兩性から成立してゐることを知つたか、これは恐らく想像説であらうと思はるるが、ベネーデン氏は、確とこれを生物學の上から、研究したのであるから、根據がある。

その説に依ると、兩性生殖を營んで、發生するところの生物は、すべてみな雌雄の、兩性

細胞の、會合によつて生じたものであるからして、その軀體を組織するところの各細胞は、みな雌雄の兩性分を、平等に具へてゐる理である。併し發生の上に於いて、その性質の、特に著しいものは、外部にその形質を現はして、雄或ひは雌となるけれども、その體質はみな、雌雄の兩性分を併有するところの、雌雄同體（一三四頁）になるといふことである。斯様に細胞には、生殖の初めから、既に兩性を含んで、男の細胞と女の細胞と、異なつてゐる。故にこれを細胞性 Cellular Sex. といふのであるが、その細胞中に含める性は、單性にあらずして、兩性であり、而も一方は潛伏してゐるので、これを潛伏性 Concealed Sex. と稱するものである。

此の潛伏性説は、興味ある問題で、有名な、チャールズ・ダーウィン Charles Darwin 氏も、その大著「馴養に依る動物の變化」に於いて、かういふことを述べてある。曰く雌雄は最初より、既に兩性の質分を含んでゐるから、雌雄同體である。それ故雌雄の體中に、他の異性の質分の存在することを名づけて、異性の潛伏即ち伏在性と云つた。

併しこの伏在性は、平常の場合には、深く隠匿して、現はれないけれども、偶々生殖器官を毀損するか、或ひはその生殖機能を失つて、他の異性に對する作用の、無くなることがあると、

その潛伏してゐる他の伏在性が、茲に現出して、その作用を爲すのである。

なほダーウキン氏は、雌にたゞに、其の生殖器の毀損したときのみでなく、老年になつて、性慾が衰へて來た場合に於いても、亦同一の現象を呈することを證明した。例へば老ひたる雌鶏は、足に距を生じて、鬪争を好み、或ひは頭上に鶏冠を生じて、雄鶏の如く、屢々時刻を告ぐることもあるが如きこれである。

支那の諺に、牝鶏晨を告ぐるときは、その家に禍ひありと言ふてゐるのは、女の出しやばるのは、その家の紊れであることを、諷したのであるが、女性の男性化して、夫と並ぶやうになつては、實際その家が、圓く治まるものでない。支那人も中々理窟に長けてゐる。

それはさて置いて、老雌鶏の雄化することをもつて、古人はこれを一種の病的現象となし、食物や、氣候その他の原因に依つて、稀れに生ずるものと思つてゐたが、その實は然らずして、潜在性（雄性）の發達に基づくものなること、ダーウキン氏の研究に依つて、明白となつたことは、前に述べた如くである。

其の後、科學の進歩に依つて、男女兩性の分かる原因も、その大原理を、ここに發して、遂にあらゆる生物、及び人類のすべては、その體中に含める兩性分中の、特によく發達せる性

に依つて、或ひは男性となり、或ひは女性となるものなることを、論ずるものあるに至つた。かういふ理由なるに依り、此の神祕なる同性愛の、如何なるものなるか、その原因を究むるには、遡つて男女の起源に、到着せざるべからざること、忘れてはならぬ。

### 第五節 複性と男女の區別

#### 第一項 複性の原理

前に男子の體中には、他の女性分が含まれ、又、女子の體中には、他の男性分の潛伏して、男女といふものは、たゞ外形上便宜に與へた名稱であつて、謂ゆる複性なることがわかる。複性 Compound Sex. とは、廣義に於ける半陰陽の謂ひであつて、男女は發生の始めより、各々兩性を含んでゐるものである。

これに關し、ワイニングル氏は、男女を形態學上より觀察して、精確に男女の區別を設けるには、その中間に、幾種の男女を、分かなければならぬと云つた。此の説を敷衍すれば、男女の區別は、生殖器の差異にあつて、その根本は、體を組成する細胞にあるけれども、その細

胞中に含まるゝ性は、單一なるものにあらずして、既に兩性の相混じたる、雌雄同體であること、ペネーデン氏の説の如くであるとすれば、その分量に依つて、男女の階級を別かち、それに従つて、名稱を與ふることが、至當であるといふことになる。

#### 第二項 兩性の類似する原因

クラフト・エビング氏は、更に一步を進めて、兩性の質分の配合如何に依つて、謂ゆる女性的男子、或ひは男性的女子を、生ずべしと云つた。

此の女性的男子 Effeminitio といふのは、俗に謂ふところの「女のやうな男」であつて、これに又、男性脱化 Eviratio と女化 Androgynie との二階級に別けてゐる。次ぎに男性的女子 Viraginität とは、「男のやうな女」といふことで、之れにも亦、女性脱化 Defeminatio と、男化 Gyraidie との階級がある。更に解かり易く言へば、女性的男子は、女らしき男、男性的女子は、男らしい女といふことになるのである。

そもく此の「やうな」、又は「らしき」といふことは、類似の意味であつて、ワイニングル氏の説の如く、これをもつて一種の男女とするときは、説明するに頗る便利であるけれども、